



人文学部文化学科長 柴田 正美

ポール・ラングランが生涯教育を「教育改革の理念」として提唱したのは1965年のことである。成人を対象として行われていた「社会教育」を、人生のあらゆる局面で必要とされる学習の「一部分」と捉え直す視点で提起されたと理解される。この考え方は多くの人に受け入れられ、人の一生は置かれた環境に対応して、順応したり反発したりしながら形成されるという認識が定着する。家庭における接触から、社会的環境もさることながら、身体面でも精神面でも「学習」という側面が重視されることとなる。大学における教育にも「その一部分」であることが、強調される。環境の変化という外的要件と併せて、内的要素においては、段階を追いながらも「連続性」が強調されていると考えてよいだろう。生涯学習は、自らの置かれている位置を認識したところから始まるとされる。

わが国には「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」という長い名前の法律がある。いわゆる「生涯学習振興法」である。そこでは、生涯学習に係わる機会の総合的な提供の方針、生涯学習に係わる機会の種類及び内容等に関する「基本構想」を都道府県が作成し、文部科学大臣や経済産業大臣等の承認を得たうえで、都道府県が実施するという体制を整備することが規定されている。生涯学習社会の根幹を都道府県単位で形成することが定められている。中等教育までの体制と同じワクで進めるのが生涯学習ということになる。

2001年度には全国の市町村でIT講習会が開かれた。コンピュータ操作リテラシーに関わる学習機会が広く提供されたと見ることができる。全国津々浦々で開くためには大量の「講師」が必要となった。それぞれの市町村では、講師経験のある人を募り、講師になりたいと申し出た人に即席の「指導者」講習会を設定した。けれども教える側の理念・倫理は一つにまとまったとは思えない。こうしたことが相俟って、IT講習会を「受けること」のみが一種の流行となり、ITを使いこなす人々の底辺を広げる実態を創り得ないままで推移している。さらに、ここで獲得された能力を展開する場所が準備されていないため、コンピュータ操作リテラシーが情報リテラシーに発展しないままで終わっている多くの受講生が生まれ出された。相次ぐOSの変化や、つぎつぎと開発されるアプリケーションソフトは、受講生たちの能力と知識を日々陳腐化させつつある。生涯学習振興法で整備することが目標とされておりながら、実現できていないままに進められた結果である。段階を追いながらの連続性は、社会的な整備のないところには期待することができないことを如実に示したのが今回の実験であったろう。と同時に、機会を提供すれば着実に受け入れる素地が存在することも実証された。

生涯学習時代を確かなものにするためには、地域の要求を予測し、それに応えるための仕掛けを計画的に形成することが肝要だと考える。

(しばたまさみ)

# 三重における進取の精神

永井 諒×永井規夫×山中克敏（司会） 渡邊 明

渡邊 今回この二社を選ばせていただいたのは、三重県で一番力強い会社として、頭に浮かんだからです。永井さんのところの製品は機械をカバールするというもので、山中さんのも機械に塗ってカバールしていくわけです。両方ともカバールするという共通点を見いだしたわけです。さらに両社とも海外展開をやっておられる。まず永井さんの方から、会社設立の契機をお話いただけますか。

## 蛇腹こそ天命

永井(諒) やはり物を作ってみたいというのが出発点ですね。自分の家で、写真の引き伸ばしをやるようになりまして、それには蛇腹が絶対に要るんですよ。焦点を合わせるために伸ばす必要があるのです。

永井(規) もともとカメラの蛇腹は、皮で作っていたのです。それを塩じ加工にして大量生産を可能にしようと思いました。

永井(諒) 当時、蛇腹を作るのは、一日に二、三個しか

できない現状だったのです。これを一遍に五百個、千個作らなければならなくなりました。うちではそれまで歯ブラシのケースとかいろいろなケースをこしらえていたので、蛇腹を作る方法はないのかという相談を受けたわけです。それまでは塩化ビニールで作っていたのですが、それだと固くなるので、酢酸系の樹脂でできないかと試したのです。それがうまくいいたので、メーカーさんも欲が出てまいりました。ボラロイド社の要求に応じるものはできないかということになりました。それで試しに送ったらオーケーが出た。作り始めたときは、二百ワットの電球対応だったのですが出荷する頃には三百ワットの電球に替わっていた。試したところ、熱が強すぎて伸びてしまっただけです。そこで本来の蛇腹、要するにヤマトですね、トツジの皮で表打ちした蛇腹を作ってくれないかという話になりました。三月ほどの間に二六五〇台のオーダーをいただきました。それを私と家内とが昼夜兼行で、二月月で納めさせていただいたわけです。その後ボラロイドの方が来日なされて、一月月に蛇腹を一万個できないかというお話をいただいたのです。とてもじゃないけど、そんなことできるわけじゃないですね。でも、結局、三カ月の注文を二月月で納めました。それが可能になったのは、従来の方法より十倍以上の速さでできることを考えついたからなのです。そうしたら、今度は大きな印刷機械に使う蛇腹を作ってくれないかという話に広がってまいりました。それで、事業が拡大してくると、蛇腹こそ天命ではないかと思うようになりました。少なくとも、光学関係の蛇腹だけでも世に出してみたいということまでやってきたのが実情です。渡邊 前にお邪魔したときに、企業哲学というのですか



永井 諒  
ながい あきら

1930年4月22日生。  
(株)ナベル代表取締役  
1973年 ジャバラ製造開始  
1988年 (有)永井蛇腹設立  
1992年 (株)ナベル社名変更

ね、温故知新なのですよとあしやられました。今のお話をつかっていますと、分かる気がしますね。  
山中 蛇腹屋さんというのは、同業者さんはたくさんおられるわけですか。  
永井(規) もともと蛇腹屋というのは、機械関係のカバール、ゴムを素材にした工業用蛇腹をずっと扱っていました。  
永井(諒) 光学関係は家内制手工業というか、そういう在り方ですと来ていました。  
山中 とすると、家内工業みたいなのを技術革新された、そういうことですね。  
永井(諒) そうですね。時代が平和になり、使う人が多くなりそれでは間に合わない。それが量産に結び付いた。まあマキーンであったということですね。  
山中 うちも一緒です。塗料は液状ですから大量にできるわけです。ところがお客様が満足しない。それでこんなできないかという要望がくる。それに合わせて作っていく。そういうやり方です。口入はないですけど、悩みはあまり伸びないということですね。  
永井(諒) うちの事業が拡大したのは、息子との協力関係も大きいのです。息子が宣伝のリーフレットをまいてみたらどうだと提案しまして、五百枚作りました。そして、世間知らずの怖いもの知らずで、あっちこっちのメーカーさんにはまきました。そうしたら、いくつかの大手から

連絡がありました。そこで要望を聞いているうちに、息子がお父さんこれは企業になるぞ、やるつもりじゃないかという話が出ました。ちょうどそのころ、彼は若手ばかり集まる勉強会に行っていました、晴海の展示場へ行ってちゃんとアドバイスをもらいました。

永井(規) 晴海の展示会で、工作機械メーカーの係長さんと話をする機会がありました。長い蛇腹で、レーザービームが当たっても燃えないものが欲しい、ということなんです。うちはカメラの蛇腹の特許が取れ、医療機器が立ち上がったばかりでした。自社の柱として、ようやくカメラの蛇腹だけではなく、何か伸びたり縮んだりするものにしてほしい始めたのです。その人と話をして、課題を与えられたのです。二丁にこたえていく顧客主義ですね。これが事業の拡大を導いたのだと思います。

山中 それと、たまたま五百枚のリフレットで東京から注文が来たというのは、これはすごいことだと思っ。要するに二丁があつたということですね。

永井(規) その頃は受験生で全然分からなかつたんですよ。分からないから、父に聞いたら、蛇腹製造法の特許が取れ、オリジナルな素材も開発できたから、それを世に問うことがおまえの仕事やと言われました。それで自分で文章を考え、写真を撮ってました。まくときの方法は何も分かりませんから、工業会から名簿を取り寄せて、蛇腹を使ってくれそうな会社を探しました。キャンソンの社長に送ったりと馬鹿なこともしました。そういう失敗もしながら、五百枚の中から少しずつ当ててきました。

山中 社長に送ったのが良かったのと違いますか。そういう発想がいいですね。係長とがではいけません。

### 田舎にいても光り輝く

山中 だけど、親子でいって、その辺がえらいと思

ます。私も二代目ですが、おやじとは仕事していません。一九六四年におやじが死にました時は大学生でした。それで卒業せずに帰ってきたのです。だから、何も修業しないで会社を継ぎました。その前には、大阪の布施でカメラの製造をやっていたのです。戦争の時に疎開して、名張に工場を造りました。考えてみると、全く市場から離れた場所で製造するということになりすね。塗料というのは、もともと神戸の造船所向けで、大阪の地場産業ですよ。大体淀川沿いに工場はあり、布施にもあります。

永井(規) あの辺は加工屋さんがいっぱい。石屋さんとか。

山中 まあ、その場所です。主に木工用のラッカーで、おもちゃとか柳こつりにクリアラッカーを塗るのをやっていたんです。ところが、名張にいた情報も入ってこないし、時代の動きとは違う道を歩み始めてしまったよ。たまたま三重県には桑名に鋳物屋さんがありまして、石炭ストーブを作っていました。それで、それをきれいな色にしたらどうやというようなことを考えました。黒いままではなく、ベージュ色とかアズキ色とかお化粧して、もっと売ろつじやないかということだと思っ。それでシリコン樹脂の塗料を手付けしました。それは非常に苦労があつたですよ。うちの先代も、永井さんのようにパフレットを作って、よく家へ持つて帰ってきて、封筒に入れていたの思い出します。

永井(規) 今日お邪魔するのには、私もホームページを見せていただいて、塗料には二つの役割があると知りました。一つはカラーリング、もう一つは保護する、カバーだと書いていらつしやる。その役割を踏まえて、さらに機能、特に福祉とか環境保全とかそういうものを持たせて体系付けられていると理解しました。そういう体系化ですが、実際のプロセスでは、おそろくお客さまの一本の電話



永井規夫  
ながい のりお

1957年2月17日 大阪府生  
1980年 関西大学法学部卒業  
1988年 (有)永井蛇腹  
専務取締役就任  
1998年 NABELL USA社長就任

から開発し、どれだけ市場の展開があるかを探してこられたのではないかと想像しました。オキッモさんの展開は僕らが目指している方向と重なり合う部分が、非常にあるのではないかと感じたのですが。

山中 おつしやるのとおり、非常に共通する部分があると思っ。ただし、私は技術屋ではありませんし、おやじと仕事をしていませんで、決定を行う場合、私がすべてするのではなく、皆さんでいろいろやってみるということが一番いいと考えています。その辺はちょっと違いますかね。今にして思えば、あまり細かい技術のことでも分かりませんから、若干引いて物事を考えるということをしてきまして、それがかえって良かった。人が育っていくことに寄与したのかも知れません。

永井(規) よく分かります。おつしやる通り。

山中 さきほどのストーブに話を戻しますと、これが結構もつかりました。それを契機にして、弱電さんに入つていったのです。それから自動車のマフラーとか、単車のマフラーをやりました。そこでも、色付けと保護を主軸に、第三の機能を加えることを考えました。マフラーですと、熱源が横にあるわけです。それを利用したものが何かできへんかと、お客さんから要望があつたので考えてみたの

鼎談 永井諒×永井規夫×山中克敏 (司会)渡邊明

です。熱が上がるものといえば電子レンジがありますね。その壁面に塗る塗料があります。そこに触媒を入れました。肉とか油がはじけるものを焼いて、それが壁に付いて汚れる。でも油が触媒に当たると、炭酸ガスと水に変化するのです。

永井(規) 通常の化学変化はしないけれども、熱があると変化が起きますね。

山中 はい、だから、そのものを利用するという工夫を加えながら、だんだん特殊なものになっていったわけです。おっしゃるようにお客さんと一緒に話をして、こういう素材でこういう性能が欲しいんだということや、そこそ試行錯誤の繰り返しで商品を作っているのです。それが信頼につながってきました。

永井(規) 何か工夫して作ってくれるなら、頼んでみようと思いますものね。

山中 頼んだら何とかしてくれるという信頼感ですね。そういう仕事を続けていくと、名張りにしても、情報が集まってくるのです。田舎におりながら、光り輝いていることにより、そこへ情報が集まってくる。そういう経験を積



山中 克敏  
やまなか かつし

1940年 昭和15 生  
オキヤマ株式会社 代表取締役会長  
兼CEO  
名張21世紀ケーブルテレビジョン(株)  
代表取締役社長  
2002年3月、同志社大学大学院商学研  
究科博士前期課程修了予定

み重ねてみると、日本だけではなく世界中にいけるのじゃないかと思いはじめました。アメリカへ持っていったらどうやという話も展開しました。

## 世界で試してみる

渡邊 両社ともアメリカに進出していらっしゃるのですがその理由は何ですか。

山中 私は単にアメリカで試してみたいと思ったんです。もともと塗料はアメリカから来たものだし、シリコンも向こうから来たノウハウですね。でも、日本人のわれわれも一生懸命やっている。そこで、アメリカへ持って行って試してみたらどうかということや、フォードにも行きましたし、GMにも行きました。日本企業の現地の会社にも行きました。今のところ悲しいかなお客様は日本企業ばかりです。ただ、日本企業で売っている我々の塗料を塗っている車が、アメリカを走っているわけです。

永井(規) それはそうです。一般消費者は受け入れてくれているということですね。

山中 見ているわけです。それで、下請けさんというか、メーカーを作っている部品メーカーは、日本との合弁企業だったりするのです。そういう合弁企業の製品は、フォードへ行き、GMへ行っている訳ですから、結局わが社の塗料もそこで使われるようになる。ただ商売としては成功していない。ちよつと下手くそなんですよ。

渡邊 永井さんの海外展開のきっかけというのは、何だったのですか。

永井(規) やっぱり試してみたいということだと思います。ちよつとドイツが統合された時、ケルンでの大見本市にカメラの蛇腹関係で行かせてもらいました。その十年くらい前から海外に製品を出していたのですが、売り上げが伸びていなかった。商社任せではいけないのだからという

ので行ったのです。行ってみると、驚いたことに皆さん知っているんですね、ナバルを。ところが全然売れない。いい品物だ、でも高いと言っんです。何となれば、イギリスの会社が一品一様に対応して、為替の差を埋めながらやっていたからです。十三時間飛行機に乗って、製品を持っていい品物だと言われるのにお金にはならないというのが現実でした。ビジネスマンなのに利益が取れないというのは、全く意味のないことだから、いつかマーケットインしようと思ったのです。ちよつと一九九〇年くらいでした。山中さんのおっしゃる通り、海外に出る場合、まず日本企業に進出するという段階があります。次にアメリカの企業にだけだけ入れるかという段階になります。これは至難の技だと思います。必要としない以上アメリカのビジネス社会は話も聞いてくれません。近くまで来ておりますので伺いたい、なんていう日本の営業は絶対に許されないと。その代わり、欲しければ、今情報が欲しいんだという世界です。僕自身としては、ナバルの製品に自信がある。自信があるんだから、主観的な自信だけでなく、市場に使っていただけるかチャレンジすべきではないか。そういう意味で海外進出しました。

山中 今はそれで、現地の企業にかなり売られているわけですね。

永井(規) ラッキーなことだ。F&EメカカルのOECというソルトレックシスターにある会社に私どもの商品の価値を認めていただいて、直接お取引させていただいております。これはインターネットからの引き合いで始まりました。

渡邊 インターネットで見つけたわけですが、永井(規) そうです。インターネットのホームページですね。ホームページはヒットしてきますよ。リンクして引き合いが来る。これは結構多いです。だから、田舎という意識はあまりないですね。

渡邊 インターネットではいろいろな引き合いがありますか  
 永井(規) 最近是不況で少ないですね。でも、月当たり六千件ほど出ていて、このデータがあります。一週間に数件から十件くらい引き合いはあるので、毎日必ず入ってくる状況ですね。ただし、量産に結び付くものではないですね。

渡邊 インターネットでそれだけデータ率が高いというのはすごいですね。

### 情報に対する目

渡邊 この中でロケタス・ノートですが  
 永井(規) ノートとは業務日報、営業日報を管理するツールソフトウェアですね。

山中 営業くんが前日に行った業務を明朝の十時までにまとめるものです。現在ではみんなが見られるようにコンピュータに載せているのです。社員全部が見られます。渡邊 情報共有化という意味では、オキッモさんはものすごく早かったですね。

山中 営業情報は非常に関連性があるわけです。大阪のS社がどこか注文を出すという情報があったとする。



渡邊 明  
 わたなべ あきら

1946年生  
 三重大学人文学部教授 経営学  
 札幌学院大学、四日市大学、埼玉  
 大学をへて、1998年三重大学人  
 文学部教授。  
 2001年より社会科学科長

ると中国へ出張した社員がいろいろ引き合いがあったという。東京でもそういうのがあった。そうするとS社の考えが立体的に分かるんです。こうしたことはパワハラで見ているとわからないことです。今はそれを、営業は営業情報、技術屋は技術情報、資材は資材情報というところで共有しています。最近ではさらに、顧客情報を技術屋に伝えるというところも試んでいます。これには問題もありませんけれど、今は営業と技術を合わせた一つの部にして営業開発部としています。

渡邊 それはいつ頃から始めたんですか

山中 去年ですね。ちょうど一年たちました。なかなか効果が上がっているようですね。

永井(規) お客様の観点からすると、スピードが早くなったり、回答が早いとか、メリットが出ているのじゃないですか。

山中 現に、私が会長になってからのほうが利益は上がっていますね。(笑)

渡邊 このところいろいろな企業を回っているのですが、どこでも問題になっていますのは、営業と技術のコミュニケーションの問題ですね。営業は、こんなものを作れとアパートなことを聞いてくる。技術屋さんとしてはそれを作らなければならぬ。そのコミュニケーションがうまくできないわけです。で、アパートなことを聞いてくるから、もうとアパートなことをさげすんで言っているわけですね。

永井(規) 伝聞になりますよな。

渡邊 そうなんです。何とかならないかと言つので、営業部門と技術部門をくっつけてみたらと答えるのですが、くっつかないと言つんですよ。

山中 やつてしまえば、いけるのじゃないかな。

永井(規) これは全体最適という発想に切り換えるために作られたのですか。

山中 全体最適は『日経ビジネス』のT.O.C(Theory of

constraints)記事がヒントになっています。でも、これうちやり方と一緒にではないかと思つたのです。説明会が何か聞きに行きましたが、もうやっているのですよ。なかなか効果を上げているようですね。

渡邊 ナヘルさんは、やはり営業と技術開発は一体となっているのですか。

永井(規) 一応営業技術部になっているのです。営業部とか技術部とかついているほうが、整っていますね。

永井(規) まだ、みんな若く経験が浅いものだから。

永井(規) 私たちのように人材がいないと、自分でも提案できるといって、営業くんがクリエイティブな者が行くことになり。そこで実績を残していきますと、ナヘルさんの良さは速さなんや、それを大事にせなあかんぜ、大きくなくて対応が悪くなったら嫌だな、みたいなことを話してくださるのです。ところが、なかなか皆がオールラウンドプレイヤーにはならない。チームでオールラウンドプレイヤーになって、お客様本位に情報をお返してできるようになると思うと、本当に難しい問題ですね。

山中 それはなかなか大変だと思つます。だんだん初心を忘れますし、社長の気持ちは伝わらないというかサラーマン化します。

永井(規) いつも言つんです。蛇腹は顧客情報の一つにすぎないのであって、他の情報との関係が重要なんだ。何

### 鼎談

永井諒×永井規夫×山中克敏 (司会)渡邊明

か違う情報に携わった時こそ、一生懸命やらなくてはいけないのだと。ところが僕なんか以上に、蛇腹を作るメーカーの人間になってしまっている。だから、蛇腹以外の情報に対する目を閉ざしてしまう。違うだろう、一本の電話を大事にしていたじゃないかって言うのですけれど、いや、こんなの僕のとこまでやっていることと違いますから、と言いますね。「おまえは何や生きているのか」「みたいになんことになってしまっているのです」。

山中 なってしまっている。うちは、まさに今そうなのです。その病にかかっていますよ。(笑)

永井(規) それをどうするかは課題で、逆にそこをやりがいがあると思うたですな。

渡邊 そうですよ。経営者の生きがいというのは、その辺にあるのじゃないですか。

山中 経営者の思いはなかなか社員に伝わらない部分がある。それは悲しいですわな。

## 経営戦略・経営哲学

渡邊 オキッツさんの、今の戦略商品というのが何になりますか。

山中 今、海外はタイ、韓国とアメリカに展開しています。海外展開を契機に仕事も増えました。われわれのような中小企業でも大企業に勝つチャンスはありますよ。新商品では光触媒塗料があります。二酸化チタンです。それを塗っておくと、排ガスのNOxがNO<sub>2</sub>に変化して雨に流れる。大気浄化ですね。

永井(規) あれは、社会的にスカッとした、気持ちのいいものですね。

山中 たは、この煙も消えてしまつたですね。だから、医療現場の蛇腹にも使っていただけだと思います。殺菌作用、酸化作用もあります。これは売り商品ですね。尼崎

の公害訴訟の判決文に、光触媒などを使ったものにしてという判決が出たんですよ。

渡邊 それは、オキッツさんが作っているのですか。

山中 これはわが社と、あと二、三社やっております。この技術は、東京大学の藤原先生が開発・研究したので、わが社は、地球温暖化を防ぐため大気浄化についてやるということと、工業技術院と協力しています。それともう一つ、本屋をやっています。

永井(規) 行きました。

山中 そうですか。ありがとうございます。

渡邊 どこでやっておられるのですか。

山中 前の工場の跡地で、これは本業とは離れています。

渡邊 二十万冊も在庫があるとか。ものすごい数ですね。

永井(諒) すごくいいね。

渡邊 ケーブルテレビは、

山中 これももう十年くらいになりますかね、開業してから。

渡邊 この工場団地にケーブルが入っていたら、三重工科大学の企業内教育用の授業を流させていただけるとありがたいな。

山中 線は行っていると思いますが引くか引かないかはその企業によります。

渡邊 やはり日本が駄目になったのは、ものづくりをばかにしたところがあるんじゃないですか。だから、ものづくりをキーワードにして、地域の産業政策の一つとして大学の授業、特に工学部のを流してみたい。

山中 そうですね。多分できますよ。

渡邊 最後に、両社の経営哲学を簡単に話していただけませんか。

永井(規) その前に、先程の戦略的な商品ともしやられた時に申し上げなからたのでご紹介いたします。今までスポットでやってきた、例えば医療機器の一部、あるいはは

ーザーの一部を、全産業に行き渡っている部品メーカーさんの要素部品として、海外との技術協力を加えながらやっています。という展開が一つ。それから中国で蛇腹を作っていただけそんな工場を探し、その契約で、ナベルの品質を維持しながら市場展開していく、あるいは逆輸入することを考えています。経営哲学では、やはりお客さま、最終的なエンドユーザーさん、つまり社会だと思っただけでも、エンドユーザーさんに向けている提供していく。自分たちがやれる範囲内では二〇パーセント、人がやれない以上のことをする。しかし、あくまでも謙虚にエンドユーザーさんの立場に立つていく。それが、故きを温ねて新しきを知る「いつことだ」と思っています。



山中 経営哲学は「これはもう顧客中心に尽きる」と思うのです。さらに私の役割は、いかに世代交代を円滑に行うかですね。中小企業は人手不足で、人はいるのだけれども適当な人がいない。それは世代交代していかねばいけない。常に新しくチャレンジをしていく。そこに役割があるのでないかと思っています。さらに、わが社の進むべき道としているのは、「魅力ある人、魅力ある会社」ということです。みんなで頑張る魅力ある会社に磨き上げていく。社是も固定せず、いいのがあったら取り換えたらい、と「いつことだ」と思っています。

渡邊 いいのがあったら換えようという、そのスタンスが重要ですよ。どうも、本日はありがとうございました。

(二〇〇一年九月二九日 名張市 オキッツ株式会社本社にて)

# 三重のいよびば(二)

## 山本真吾



(大綱・巻首部)



(前編・一三・刊記)

三重大学附属図書館蔵『和訓栞』

### 国語学史上の 谷川土清の業績

谷川土清(一七〇九—一七七六)は現在の津市八町に生まれ、その生家は今日も国の指定史跡「谷川土清旧宅」として残されている。彼の業績は国語学、神道など多岐に亘るが、とりわけ語学上の学説は早くから注目されており、その業績は、「倭語通音」(日本書紀通證)宝暦二—一七六二年、巻第一付録)を世に示し最古の活用表を創成した点、また『和訓栞』という我が国最初の本格的五十音引き国語辞書の完成を遂げたという点の二つに顕著であることは、現在も『国語学史』の諸書に基本的には継承されることである。

### 動詞活用図の創成は 土清の業績に非ず

竹田鐵仙は、昭和七年に『悉曇相通説』と活用研究に及ぼせる其の影響」という論文で、土清の活用図に先立つこと

およそ百年前の正保三—一六四四年刊『韻鏡図』の中に、すでにこのような図の見えることを指摘している。しかしながらこの説は学界に十分に周知されず、昭和五九年に尾崎知光により再度この説が宣伝され(『勉誠社文庫二—一』『和訓栞大綱』)さらに、私どもが京都・山科の古刹随心院の経蔵から発見した『伊呂波集韻』(明暦二—一六五六)年刊)にもこれと近似した活用図の載せられていることが判明し、随心院聖教類の研究(汲古書院・平成七年)の中で紹介した『近藤泰弘氏執筆』。

このように、土清が活用表を創成したという説は、再三否定されてきた。にもかかわらず、なおも土清の業績のみに「活用表の創成」を挙げている専門書は少なくない。土清のこの方面での業績の真価は、活用表の創成という点ではなく、これが本居宣長の目に止まったことにより、宣長学派(宣長『御国詞活用抄』・春庭詞の八衢)の活用研究を促したという点に認めるべきである。

### 和訓栞の達成

『和訓栞』の評価は、ここ数年になつて格段に高まっている。近代辞書の先駆を果たしたと説かれる大槻文彦『言海』の成立にしても、『和訓栞』の影響が濃厚であることが指摘されるように

なり、『和訓栞』の近代辞書への連続性が注目されてきている。

五十嵐由美氏の調査によれば(二〇〇一年度本学卒業論文)、ことばの意味を解説するに際して引用する例文は、自身の語源説に沿うものを厳密に選択しているという。たとえば、「うちはし」という語は、『和訓栞』では、仮に打(ち)渡したる橋也」と解説され、『万葉集』の「はたもののみ木もて来て天の河打橋わたす君が来むため」(巻一〇・二〇六二)を引く。『万葉集』には他に「うちはし」を含む歌は五首あるが、その中で、この「はたもののみ木」を、仮に「橋」として用いるという歌は、彼の解説に即して最も適切である。

『和訓栞』の成立は実に複雑であり、未だに解き明かされない問題が山積している。三重大学附属図書館にも、幾種類かの良質の版本を蔵しており、これに基づいて国語辞書史上の彼の業績の真価に迫りたいと思っている。

やまもとしんご  
人文学部助教授・日本語学

特集

## 三重における進取の精神

# 質的改革としての先駆け

## ——三重県の行政改革——

梅田次郎

### I はじめに

政治不信から政治改革が叫ばれ、行政不信から行政改革が叫ばれる。政治と行政は密接に絡み合っているから、どちらか片方だけが不信という状況は少ない。政治には選挙という武器があり、選挙による勝敗の結果には誰も一応納得せざるを得ない。しかし、行政の場合はこのような区切りがない。行政改革の必要性が絶えず叫ばれる所以でもあり、また行政改革を行うてもしはらくすると元に戻る所以でもある。

平成七年の北川知事誕生以来、三重県が取り組んできた行政改革が全国的な注目を集めているのはなぜか。それは、これまで行政の世界で長く守られてきた価値観の崩壊を先取りし、その転換にいち早く挑戦しようとしたからである。また、改革の原点に官僚組織の病理現象問題を捉え、これに根源的に対処しようとする手法を開発し、実践したからである。ここでは、この価値観の転換と組織の病理現象の克服について述べてみたい。

いま地方行政でどのような価値観の転換が起きているか

川の流れに例えてみよう。表流水としては、地方分権一括法の制定や介護保険制度のスタートなど大きな変革の流れが目に見える形で進展している。これと同時に、伏流水として、これまで行政組織の中で守られてきた価値観が崩壊し始めている。

北川知事が誕生した平成七年ごろから、全国の自治体で、また国の各省庁でも同じような価値観の転換を促す事件や現象が連続して起きている。地方行政に限られない価値観の転換を概観してみよう。

行政システムの再構築を促す価値観の大転換

- (1) 建前から本音へ
- (2) 非公開から公開へ
- (3) 曖昧(裁量)から明確化(基準化・数値化)へ
- (4) 完全無欠(官の無謬性神話)から事中・事後評価による修正へ
- (5) 自己弁護(自己の正当化)から自己否定(官の論理のみによる行政サービスの否定)へ
- (6) 組織(大部屋)起点から個人(人)起点へ

第1に「建前から本音へ」。

三重県は平成八年、カラ出張の問題で十一億円余を返還し、建前と本音の使い分けを止めることを表明した。カラ出張問題の是正は、「建前から本音へ戻ろう」ということを、痛みを伴いながら分りやすく知らしめた事件となった。この対処如何ではその後の行政改革運動がストップしてしまうのではないかと危惧されたが、実はこの事件の解決を契機に改革に加速がついたのである。カラ出張をなくしたからこそ、政策評価に真面目に取り組める。一千万円の予算の中に五十万円のカラ出張分があったのでは政策評価どころではない。

第2に「非公開から公開へ」。

三重県情報公開条例は昭和六十三年から施行されていたが、黒塗りの非公開部分が多かった。しかし、これも、カラ出張問題を契機に食糧費・交際費の公開が全国的に進み、非公開から公開への価値観の転換を促した。その後も公開の範囲は拡充の一途をたどっている。やはり公開されるとなるとまず役人の行動が変わる。公開は、実はここに大きな意味がある。国においても、やうと平成十三年から情報公開法が施行された。



第3に「曖昧(裁量)から明確化(基準化・数値化)へ」。

三重県は平成八年度、全国に先駆けて、事務事業評価システムを開発し、全庁的に実施した。各事業について、目的を明確にして妥当性を見つめ直しながら、成果目標を数値化するとともに、達成度を毎年測定、公表していくマネジメントに挑戦した。前例踏襲や補助金行政に流されがちな官僚組織の病理現象を絶えずこのシステムでチヤクシ、成果志向・結果重視の生活者起点の行政運営を目指したのである。当初は、「数値化や「評価」に対する抵抗感が強かったが、いまや事務事業評価システムが全国の地方自治体に波及している。国の各省庁においても、平成十三年に制定されたいわゆる政策評価法に基づき実施し始めている。

第4に「完全無欠官の無謬性神話」から事中・事後評価による「修正」。

全国各地でのダム工事等の中止発表。これは、役所の従来の方針を否定することであり、かつては想定されないシナリオである。完全無欠という官の無謬性神話の中で続けられてきた公共事業が、途中の評価、事後の評価により修正され、あるいは中止され始めたのである。

第5に「自己弁護(自己の正当化)

から自己否定(官の論理のみによる行政サービスの否定)へ」。

住民訴訟は職員にとって愕然とする事件である。なぜなら、マニュアルに従って仕事をしたにもかかわらずその職員が個人的に訴えられる。もはや「マニュアル通り」で正当化されるものではなくなっていました。負ければ個人として費用を負担しなければならぬ。このことは、役人の価値観を、自己弁護一辺倒から、今までの自分・役所を否定することにもあえて切り込む方向へ転換させた。

第6に「組織(大部屋)起点から個人(人)起点へ」。

外部監査人制度の採用は、それまでなされなかったような指摘を促進した。なぜなら、例えば外部監査人が公認会計士や弁護士であった場合、その人は自分の資格において指摘せざるを得ない。指摘しないと自分が否定される。今までは、まあまあ、役所は「こういうものだ」と処理してきたことに對して、「これはおかしい」という指摘がなされるようになった。役所は従来大部屋主義といわれ、常識的な生活者の感覚とかげ離れた前例踏襲・横並び主義に陥りがちな組織を守る論理で処理されることが多かったが、組織に縛られない個人の感性を重視する方向へと価値観が振れる

ことが起きているのである。

## II どのような行革手法を開発したのか

(1) 行革に二つの方式

これほどの価値観の転換が行われてくると、今一度行政サービスそのもののあり方を整理し直し、行政システムを再構築する必要に迫られてくる。そこで、行政改革の方式も転換せざるを得なくなってきた。

従来の行革手法は、組織や事業量を変えろという量的改革。つまり人事や予算を担当する総務部の権限に基づいて改革である。財政赤字対策の発想が強く、短期達成型で、物事を根本から変えるのではなく、とにかく量的に削減することが至上命令であった。

新しい行革は、組織の中で働き、制度を運用している職員の意識・価値基準を変える方式で、質的改革を目指す。二つという改革は職員総参加でなければできない。さらに職員参加だけでなくとまらず住民参加にまで広がるべきで、情報公開は必然的な流れとなる。これは短期的な達成と言うより、長期的・段階的な達成を目指す。この場合、職員の自発的な変革力を確認しながら進めること、あらゆる

方向から取り組むこと、終始一貫した体系・手法をとることが必要となる。三重県はこの意識・価値基準を変える方法を選んだ。

(2) 官僚組織の病理現象の克服

三重県の行政改革では、官僚組織の病理現象を根源的に問題視し、これを克服する方法を開発しようとした。これまで官僚組織は、二十世紀の経済至上主義の中央集権型社会経済システムを支えてきたが、経済の右肩上がりの終焉に伴う制度疲労のなかで、その病理現象が顕在化した。地方官僚組織の病理現象には、例えば次のようなものがある。

地方官僚組織の病理現象

大きな制度設計は国の仕事。地方は国の出先機関として仕事をこなすことに終始。そのテックニックのみが発達。  
国庫補助事業はすべて無条件に善。どれだけ多くこなすが価値基準。補助金を獲得することが目的化。結果を問うことなく予算獲得に没頭。予算は一円も残さず使い切り。  
年功序列人事の中で、「大過」のないことが価値基準。思考停止の前例踏襲スタイルが蔓延。

このような官僚組織の病理現象は、官僚組織の原理原則に忠実であればあるほど出てくるものであり、この病理を絶えず治療するシステムを持たなければ、制度や組織などの改革を行っても実効は期待できない。官僚組織の病理現象を正確にとらえずに改革を叫んでも、ほとんど二、三年で元通りに戻り、その場限りの改革に終わる。改革の出発点は、官僚組織の病理現象をどのように克服するかという点にある。

(3) さわやか運動と事務事業評価システム

このようなことを背景に「さわやか運動」が生まれた。さわやか運動は、サービス・分かりやすさ・やる気・改革の頭文字をとった行政改革運動で、生活者を起点に行政を見つめ直して運営することにより行政の価値を高めることをねらいとし、一人ひとりが目標を立てて挑戦しようとするものである。

従来型の行革手法である組織改編・事業量削減・定数削減等とはりあえず横に置いて、成果志向・結果重視の行政運営を真に追求める道具として事務事業評価システムを位置付けた。もちろん、事務事業評価システムだけで自己完結するのではなく、総合計画進行管理システムや

予算編成執行管理システム、広聴広報システム、組織管理・人事管理システムと連動しながら運用することを構想していた。事務事業評価システムの大前提として、生活者起点への政策転換を明示し、職員が評価の作業を通じて、生活者起点の政策を形成していけるようになることに重点を置いた。そして、二年後に策定した総合計画「三重のくじくくり宣言」の中では、生活者起点の県政について次のように定義した。

生活者起点の県政とは

- (1) 県の行政は、ややもすると行政サービスを提供する行政側の都合で考えがちであったが、これからは、行政サービスの受け手の立場に立って行政を進める。
- (2) そして、精神的な充実も含めた、真に豊かな生活を求めて努力する一人ひとりの住民を「生活者」として捉え、支援していくことを行政の主たる目的とする。「生活者起点の県政」を展開していく。
- (3) それは、住民の自主性を尊重する行政、地域の主体性を重視する行政、より良いサービスを提供する行政である。

このような生活者起点の県政を進めるためには、官僚組織の病理現象として指摘される法規万能主義、縄張り主義、権威主義などを絶えず治療し続けることが必要であり、事務事業評価システムはそのためのひとつの道具として開発された。総合計画に定めた政策・施策・事務事業の政策体系に基づく目的・手段の連鎖の中で、生活者起点から、事業の目的は適切か、目的はどれだけ達成されたか、を問い続ける作業を通じて、職員の意識が生活者起点に変革されていくことをねらったのである。

(4) 行政改革の世界的潮流にもつながる

官僚は決して個人的な資質によつて病んでいるわけではない。官僚は、二十世紀の産業国家・福祉国家の建設のために、非常に真面目に専門家として働いた。二十世紀の時の流れに従い行政機能が膨張していく中で、いわば権力者のように資源の再配分の役割を担いながら仕事をしてきたのである。

ところが高度経済成長の終焉による財政状況の悪化などその福祉国家に赤信号がついて、いまや行政改革の世界的潮流は、成果志向、権限移譲・分権化、顧客志向、市場

原理の活用。四つの基本原理に基づく取り組みとなっている。これは「NPM」(New Public Management)と呼ばれる。三重県の行政改革は、この大きな流れの中で、NPMの先駆けとしても今後の展開に注目が集まっているのである。

行政改革の世界的潮流

19世紀	夜警国家と自由な市民
20世紀	都市化・工業化の世紀 産業国家・福祉国家と資源の再配分を受ける市民 官僚制が専門家として公的関与を拡大(行政機能の膨張) 強い行政と民主主義のシレンマ 一九八〇年代 福祉国家に赤信号 NPMの行革潮流
21世紀	政治 行政 市場の再構成



平成7年(1995年)	
4月	北川知事就任
7月	さわやか運動 (さ=サービス、わ=わかりやすさ、や=やる気、か=改革) 基本目標として、生活者起点の行政運営 職員の意識改革 ・さわやかセミナー ・カジュアルウェアデー ・さわやか提案 ・名刺 ・行政を成果で評価 幹部職員から研修スタート
平成8年(1996年)	
4月	事務事業評価システムの導入 Plan、Do、See の Seeの充実
9月	予算の不適正執行(カラ出張)問題 情報公開の徹底
平成9年(1997年)	
9月	「公的関与の考え方」に基づく事務事業の見直しの県議会審議
11月	「新しい総合計画・三重のくづくりに宣言」 880の数値目標 総合行政 コラボレーション(協働)
平成10年(1998年)	
4月	行政システム改革の実施 「生活者起点」に立って「住民満足度の向上」を目指す 「分権・自立」「公開・参画」「簡素・効率」 公的関与の考え方、組織のフラット化、県民局重視、人材育成、「県民の皆さんへ」マトリックス予算、発生主義会計、ハコ物抑制
8月	道路整備10箇年戦略
10月	三重県立予算要求基準(財政難のピンチを県政の体質改善のチャンスに) 「一律カットのシーリング方式」を廃止し、「あれかこれか」方式へ
平成11年(1999年)	
2月	「あれかこれか」の予算編成 財政会議、各部署局長の責任で優先順位付け
5月	予算スプリングレビュー
9月	行政システム改革バージョンアップ 「率先実行(みんなで、みずから、みなおす、三重づくり)
11月	各部署「率先実行」取組の作成・公表
12月	予算編成過程の情報公開
平成12年(2000年)	
1月~3月	生活創造圏ビジョン策定・公表
2月	「率先実行」予算・定数 ISO14001認証取得
3月	ISO9000シリーズ認証取得 行政経営品質診断結果の公表(県庁全体評価:480~490点)
4月	新・情報公開条例施行(開示から提供へ) 平成12年度各部署「率先実行」取組の作成(PDSマネジメント推進) 管理職勤務評価システムスタート 新政策推進システム検討本格開始
5月	労使協働委員会正式スタート
6月	一人一台パソコン体制確立
7月	職員満足度アンケート実施
9月	公共事業評価システム素案の公表
平成13年(2001年)	
4月	政策推進システム(仮称)の推進 行政経営品質向上活動

(三重県総務局提供)

### III おわりに

—立派なシステムよりも

立派な行政を—

三重県は、新しいシステムによる質的な改革で先駆けたことは事実である。しかし、その次元では、すでに二番手、三番手が後発の有利さを生かしながらキャッチアップし、追い越して行くものであり、その競争に汲々とするにはあまり意味がない。これまでの取り組みで、段階的であるが、職員の意識改革、県庁の組

織文化の改革、生活者起点の政策形成にその効果が出てきているが、今後さらに推進していくための課題として次のことをあげておきたい。

(1) 住民との協働を目指しているが、住民からの具体的なアクションが少ないことは否めない。これは、行政改革として、まず内部の改革から取り組まざるを得なかった状況からの限界とも言えるが、住民との協働という課題は、県庁だけではなく、市町村・市民・民間企業・NPOなどあらゆる取り組みが有効に機能した暁に

こそ、明るい展望が開ける大目標であることを改めて確認し合うことが重要である。

(2) 行政改革というと、ともするとシステムを精緻化させるなどの弊害が出てくることもあるが、関連システム相互の連動を強め、それらのシステムの統合により、戦略的に効果を発揮することを追い求めるべきである。立派なシステムよりも、立派な行政を」という方向性が大事である。

うめだじろう  
三重県総合企画局理事  
兼政策開発研修センター所長



特集

## 三重における進取の精神

## 産業革命の担い手

## 櫻谷勝美

日本の産業革命は、西欧と同様に綿紡績業の近代工業化が端緒である。四日市の伊藤小左衛門と伊藤伝七の例は、江戸時代の豪農が明治維新後、企業家上昇していくときに何が必要だったかを示す好例である。

幕末期、四日市富田の西方に武州忍藩松平下総守の飛地として四万三千石の領地があった。当時代官所の財政事務をとっていた郷士七人衆中に三重郡室山村の伊藤小左衛門(五代)(一八一九～一八七

九年)、伊藤伝七(九代)の従兄弟がいた。いずれも豪農で、小左衛門は味噌醤油醸造、伝七は酒造業を営んでいた。

伊藤小左衛門は、新しい有望な事業を探し、それに挑戦する気概とリーダーシップに富んでいた。彼が営んでいた味噌醸造業の規模は一八三七(天保八)年大豆二五〇石を使用する程度だったが、一八四九(嘉永二)年に一〇倍の二五〇〇石にまで家業を拡大した。しかし一八五四(安政元)年に起こ



旧伊藤製糸場の現景（『三重県史』による）

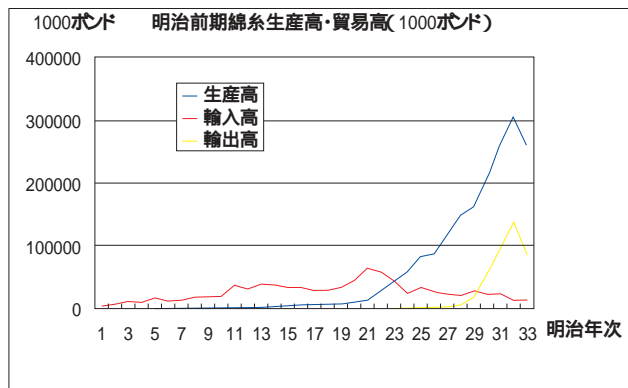
た安政地震により、建物倉庫が破壊され、家業は存亡の危機に陥った。しかし小左衛門は三人の弟たちとともに三年以内に復旧することを誓いあい、二年あまりで震災前の規模を上回るまでに回復させた。

当時東海道路交通の要所だった四日市には荷物の運搬用に駅馬、助郷馬二〇〇頭が農家から徴用され、その代償に米が農家に支払われていた。ところが米価の高騰により米が規定通り支払われなくなり、駅馬が集められなくなった。その結果物資の運搬が支障をきたしたので、小左衛門は駅を管理する役人に、馬の代用に荷車を使うように提案したが、役人はこれまでの慣習を固執して要請をききいれなかった。そこで小左衛門は、役所の幹部に粘り強く要請して提案を遂に実現した。このような逸話から小左衛門の合理主義、権威を恐れない剛毅さ、目的を実現する上でのねばり強さ、さらに地域でのリーダーとなる資質を兼ね備えた人物だったことが伺える。

一八五九（安政六）年横浜港から輸出が開始された。小左衛門はその数年前から生糸と茶が海外で旺盛な需要があると予測し、山地

を二反試験的に開墾し、五年費やして茶の収穫に成功した。横浜開港後本格的に製茶業に取り組み、一八六一（文久二年）、九二トンの茶を横浜に輸送し、二六〇〇両余の利益を得た。小左衛門はさらに地域の人々に製茶を勧め、やがて三重郡一帯は茶どころとなるにいたった。

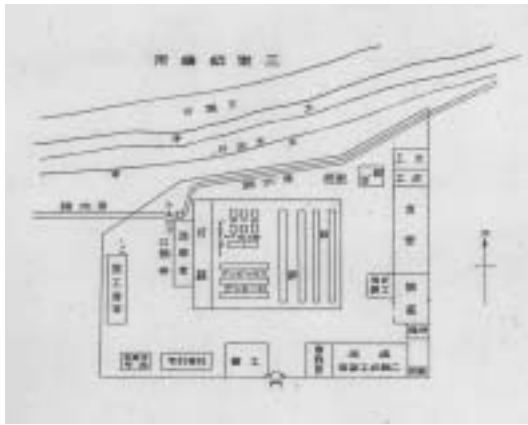
小左衛門は製茶の成功に安住せず、一八六二年桑苗二〇〇株を移植し桑の栽培法を経験者と書物から学び、一〇年以上も費やして巨葉をつける桑の開発に成功した。明治期にはいった一八七四年、工女二名を雇い製糸業を始め、翌年一〇名、三年目二〇名、四年目三〇名という調子で事業を拡大した。同時に富岡製糸場で使用していたのと同種の器械を作り、また信州諏訪から工員を招いて器械製糸に乗りだした。しかし品質が悪く富岡製糸場の四割の価格でしか横浜の輸出商に売れなかった。そこで小左衛門は自ら富岡製糸場に製法を習いに行ったが、しかしなお品質は悪く、翌年事業を拡大したものの千円以上の損失を出した。小左衛門は逆境にひるまず、彼の縁者の女性二名を富岡製糸場に派遣し、また武州の山本長平に



蒸気機関の製造を委託した。一八七七年富岡製糸場に派遣した二名が帰り、職工六二名が生糸七八七キ口を生産するまでになった。この年オランダ輸出商から品質は富岡と遜色ない、製糸を横浜に輸送した民間二〇業者のうち屈指の品質であるとの評価を得た。翌七八年一、二六七キ口に生産を拡大し、はじめて利益を出せるようになった。七七年第一回国勸業博覧会に出品し、品位優等と表彰され、七九年フランスの博覧会で銅牌を獲得した。一八六二年に製糸業を手掛けてから品質向上の努力を続け一七七年を費やして、ようやく軌道に乗せた。伊藤小左衛門の製糸場は三重県屈指の規模と品質を誇った。

これより先、明治初年に小左衛門は従兄弟の伊藤伝七(九代)ともに紡績業に関心をもち、一八七五(明治八)年にアメリカ製の手回し紡績機を購入していた。ただ彼は製糸業に傾注したために、従兄弟の伝七に紡績事業を勧めた。伝七は息子の伝一郎(一〇代)伝七、一八五二(一八八四年)を近代的工場としては日本最初の三紡績所の一つである堺紡績所へ見習いに派遣した。

一八七八年政府は、紡績業育成策の一環として、イギリスから二〇〇〇錘紡績機械を一〇基輸入し、これを民間に払い下げることを選定した。払い下げ希望者を募ったところ、三重県では伊藤伝七・小左衛門のグループと津藩の士族たちが出願した。当時の岩村定高県令が伝七親子のそれまでの紡績に対する熱意を認め推薦したので、内務省は伊藤伝七・小左衛門のグループに払い下げることに決定した。しかし七九年五月、製糸業を軌道に乗せたばかりの五代小左衛門は享年六〇歳で逝去し、その子の六代目小左衛門が紡績事業の共同名義人を継ぐことになった。伊藤伝七の紡績所は当初四万円の費用が必要で、両伊藤家だけでは負担が困難だった。一八八〇年一月政府から伝七に機械が到着したので上京するように通知があった。機械代金は二年後に二万二四一六円と確定し、これを一〇年賦で支払うべきことが政府から通達された。翌八一年三重紡績所が正式に発足する段階になって六代伊藤小左衛門が家業の繁忙を理由に共同発起人の辞退を申し出した。資金不足で困っていた伊藤伝七親子は慰留したが、六代小左衛門の辞退の意思は固く、そのため伝七家は親戚二名と近隣の有志一名から出資を仰いで当面を乗り切ることとした。紡績は動力に水力を使用することにしたので、水量が豊かで落差があり、しかも農業用水の権利を侵害しない河川を選ぶ必要があった。紡績機械の据え付けは、三重郡高角村の矢合川が本流の三滝川に合流する付近(現在の近鉄湯ノ山線高角駅近く)を選び、工場は八二年九月に落成した。しかし、水路工事に困難をきたして予算を大幅に超過し、しかも大雨による堤防決壊、夏の水不足、不景気による糸価下落などで利益がさがらず、機械代金が支払えない状態であった。そのため何度か政府に機械代金の延納を願い出て、地元村役人の督促要求圧力にも屈しなかった。八三年九月九代伝七が過労のため逝去し、伝一郎が一〇代伝七となった。一〇代伝七は、水力を見限り、八四年九月に蒸気機械を印刷局に発注し、政府には機械代金の延納願いを再度出した。この頃伊藤伝七は紡績業者が急速に増えていることから、現状の規模では事業は到底成り立たないと考え、石井三重県令に窮状を訴えた。伝七に同情し



工場図（『三重県史』による）

た石井は、一万鍾規模の大坂紡績を数年前に設立した渋沢栄一に彼を紹介した。伝七は東京に渋沢をたずね、首尾良く四日市で一万鍾規模の紡績会社を渋沢と共同で起こすこととなった。一万鍾規模の紡績会社は当時の世界最高水準のイギリス紡績業においても中位の上の規模だった。新会社の三重紡績会社は、資本金を二百万円とし、一二万円を三重県在住の発起人が引き受け、その中には既存の川島の三重紡績所を三万五千円と評価して含め、残りの一〇万円は東京を中心とするその他の地域から募集することにした。

一八八六年七月、三重紡績会社が設立された。会社は機械の据付けに先立ち渋沢から紹介されて三重紡績会社の技師長となつた斉藤恒三をイギリスに派遣し、彼がイギリス人技術者一週間七ボンドの一年契約を同伴して帰国した。こうして一八八八年一月に動力は蒸気機関、機械はミュール機七〇〇〇垂、リング機三四四〇鍾の最新式機械の据付けが完了し、同時に昼夜二交代の操業が始まった。三重紡績会社の業績は創業直後から好調で二年後には一万四四〇〇鍾規模の第二工場を建て、し

かも積極的な投資が当時の好況とあいまって、事業は極めて好調に推移した。一八八七年には津工場新設、一九〇一年伊勢紡績の買収、〇五年尾張紡績、名古屋紡績、〇六年津島紡績、西成紡績、〇七年桑名紡績、知多紡績、一二年下野紡績など三重県、愛知県、大阪府の紡績会社を吸収合併して日本最大の紡績企業に急成長した。四日市においても明治末期の一九一一年当時三重紡績会社は四日市市における一〇人以上の工場で働く労働者の六五％を雇用して名実とも四日市経済を支える企業となつた。

明治末期に三重紡績会社が軌道に乗るとともに、伊藤伝七は四日市商業会議所副会頭、四日市倉庫取締役、三重県農工銀行取締役、内外綿監査役、四日市製紙取締役、豊田式織機監査役、大日本ホテル取締役、四日市製紙社長、愛知電気鉄道取締役、三重軌道取締役、福寿火災保険取締役、中央鉄工所取締役など、在四日市の会社の起業や業界関連の企業の重役を歴任した。

一四（大正三）年三重紡績は渋沢が作った大阪紡績と合併して東洋紡績株式会社となり、本社を四日市の三重紡績会社に置き伊藤伝

七は副社長に就任した。一九一六年伊藤伝七は社長に就任し、東洋紡績は、第一次大戦中県下の中心企業となつたが、一九二〇年に伊藤伝七は本社を大阪に移転した後、社長を辞任した。

一〇代伊藤伝七は一九二四年七三歳で逝去した。彼は刻苦勉勵の努力の人だっただけでなく、時代を見通す力と、幸運を呼び込む力を兼ね備えた人物であった。

## 参考文献

『三重県史』資料編近代三（四日市市史）史料編近代（網川太一『伊藤伝七翁』（一九三六年）

さくらだにかつみ  
人文学部教授・日本経済史

特集

## 三重における進取の精神

## 進取の政治家・・尾崎行雄

岩本美砂子

三重県で進取の精神にあふれた政治家と言えば、現役を除けば、尾崎行雄(号堂)に尽きる。しかし私たちは、彼の足跡をあまりに知らないのではないだろうか。

まず基本的な知識としては、第一回衆議院選挙より、戦争を越えて連続二五回当選の記録を持つこと、国会議員と兼任可能だった東京市長時代に、日露戦争の講和の労を取ってくれた米国はフシントンが、大正デモクラシーの先頭に立ち、犬養毅とともに「憲政の二柱」と呼ばれ、一九一三年桂太郎内閣を、彼等は玉座を以て胸壁となし、詔勅を以て弾丸に代えて、政敵を倒さんとするものではないかとの名演説で弾劾して辞職に追い込み、桂を憤死させたと伝えられることなどである。しかし彼は一貫して三重県南部の選挙区より出馬を続けていた。

## 三重県との縁

尾崎は、神奈川県津久井に一八五八年に生まれた。父行正は、勤王の志士と交わり、会津征伐の土佐軍に加わるような人物であった。維新後、土佐の縁で安岡良亮のもと弾正台の役人となった。行雄は安岡邸で六歳から漢学を学んだ。安岡は一八七二年高崎へ大参事(知事兼裁判長)として赴任し、行正も同道するが、一年足らずでともども度会県(伊勢)に転任した。行正は勸業課長として養蚕の普及に務めたりした。一八七四年、九州が不穏になり安岡は白川県令(熊本)に転任、行正は同行したが、行雄は弟行隆と東京に遊学した。安岡と行正は、神風連の乱に襲われ、安岡は数日後死亡、行正は伊勢に逃げ帰った。

行正は退官していたが、地元の人々と篤く交わっていたのであろう。一八九〇年の第一回衆議院選挙で

は行雄は縁が薄かった生地神奈川県ではなく、父の住む三重県第五区より立候補して当選するのである。

## 英語を学んで

尾崎行雄は、父と東京にいた時代には、安岡邸を辞してから平田国学を学んだ。しかし高崎に移ってから、英学校に通った。尾崎の度会移転時に、同校の英語教師が伊勢山田に新設の英学校に赴任したため、英語の勉強を続けることができた。

一六歳で東京に出るからは、まず慶應義塾で学んだ。当初十歳以下の子供もいる最も下のクラスに入れられたが、何級も飛び級をして、一年たたない内に最上級となり、福沢諭吉にも注目された。しかし一年半で退学した。学問は役人になりたり人の事務をするためにするものではない」という彼の論文に、論は正しいが実行するものがない」と

と批評がついたのが不満だったらしい。しかし慶応での人脈は、のちのち彼を助けた。

次に工学寮後の東大工学部に入った。教師は全員英国人だった。実学を志したものの、化学薬品の臭いに耐えられないほどで、保健室学習になったり、日本語が読めない教師の目を盗んで新聞投書を続けたりしたが、そこにも居られなくなった。その後は、読書・新聞投書・英文和訳の日々を送った。有名なのは、二〇歳でスペンサーの「権理提要」を訳したことだ。講義や演説にも立つたが、後の彼からは考えられないことに、消え入りそうな声で不評であった。

その後、福沢の紹介で新編新聞の主筆となった。新婚の繁子を同伴して、帰京後大隈重信系の取り立てで、統計院権少書記官となるが、僅か二月、明治一四年の政変で大隈とともに下野した。改進黨



党系の新聞で論説を書いたがしばしば発行停止となった。

ついで一八八五年東京府会議員となった。翌年暮れ党争の中で、「東京に火をかけよ」という冗句を捉えられ、保安条例「違反となり、東京追放をくらった。尾崎は洋行を決意した。上海から太平洋・米西海岸・大陸横断・東海岸・大西洋・英国・仏国より帰国というコースである。一八八九年二月ロンドン大使館での大日本帝国憲法発布の祝いに出た。英国の憲政は終生彼の理想であった。大赦により東京追放を解除された。同年十月大隈襲撃の報に接し帰国した。翌年七月、初の国会に三重県より立候補

して三三歳の代議士となった。父の地元の縁、東京での政論家としての名声の他、洋行帰りもプラスであった。

#### 政界の荒波の中で

尾崎は一八九二年の第二回選挙での政府による大干渉をくぐり抜け再選、計六三年間議員を続ける。同年七月大隈・板垣による初の政党内閣に、四一歳で文部大臣として入閣した。八月、自らの知見をもつて、日本では共和政治ということとはありえないが、万一あったとすれば三井・三菱が大統領候補になるであろう。アメリカではそのような拝金主義はないと挨拶したところ、天皇を否認したと、共和演説事件」を打ち上げられ辞任に追い込まれた。その後隈板内閣も四カ月で崩れた。

一九〇〇年、従来は藩閥側において政敵であった伊藤博文が、政党結成に動いた。尾崎は、私情や獵官をめざすのでない政党政治を志して、大隈や犬養の止めるのも聞かずこの立憲政友会に参加し、政党内閣を含む伊藤内閣下で一時的院内総務を務めた。この内閣も短命だった。次の桂藩閥内閣に伊藤はしだいに

妥協し、これに不満な尾崎は脱党した。その後一九〇三年以来、尾崎は東京市長を十年兼務することになる。一九〇五年の日露講和条約を不満とした民衆による日比谷焼き打ち事件は、尾崎が整備した日比谷公園で起った。

東京市長時代は、私生活にも波乱があった。一九〇四年開戦後の九月、繁子夫人が病没した。ある日Miss Eiko Ozaki宛ての封書が誤配されたが、尾崎は気づかず開封してしまつた。間違いに気づき人を遣わせてわびを入れると、相手は例の保安条例を作つた尾崎三良が在英中に英国女性に産ませた娘で、来日していた英子ことテオドラだった。この縁で一九〇六年十月彼女と再婚した。英子は作家で、結婚の前後も日本の文学作品や童話を英語で紹介した。再婚後、家庭内の会話は英語となり、生活も洋風になった。尾崎が「宴会政治」と縁がなかつたのは、その資質にもよるが、英子夫人との家庭生活が支えだった。英子のおかげで、彼女の友人である日本の才女たちが尾崎邸に集つた。他方、再婚後は尾崎への婦人団体からの講演依頼が減つたという話もある。一九一〇年に

はベルギーの万国議員博覧会出席のため、英子をつれて外遊した。

一九一二年六月、尾崎は東京市長を辞めた。七月には明治天皇が没した。内大臣となり宮中に入った桂が、長州閥の陸軍大臣の辞任で倒れた西園寺内閣の後釜に座つたため、宮中と政府との区別を乱す」と批判された。犬養の国民党と、政友会に復帰していた尾崎の一派とが組んで、桂藩閥内閣打倒運動に乗り出した。国民の支持も強く、第一次護憲運動と呼ばれる各地での動きとなつた。冒頭で触れた桂内閣弾劾演説は、一九一三年二月に国会で行われた。犬養は桂の後を受けた山本権兵衛内閣に入閣したため、護憲運動は氣勢をそがれたが尾崎は批判運動を続け、山本内閣はシーメンス事件で総辞職となつた。

その後大隈に首相の本命が下り、政党内閣を起用した内閣となった。中正会に移つていた尾崎は、法務大臣で入閣した。欧州では第一次大戦が起こり、日本は中国に二一カ条の要求をつきつけた。一九一六年八月には、尾崎の父行正が亡くなつてゐる。十月には藩閥の圧力に耐えかねて大隈が辞職し、寺内正

所属議員となる。尾崎は軍備制限案を抱えて全国を遊説した。入場料を取って演説会をしたのは、当時全くコトクなやり方であった。妻たちが夫に、入場料分の小遣いを渡して送り出したという話もある。

同年一月原が暗殺された。普選運動・労働運動「青鞥」のフェミニストなどで揺れる世情の中、首相は高橋是清・加藤友三郎・山本と「口口代わり」関東大震災を経て一九二三年暮れに枢密院議長の清浦奎吾が駆り出されたため、閥族政治批判「第二次護憲運動」が起った。一月末衆議院解散・五月総選挙で、護憲三政党が勝利した。その後組閣した加藤高明内閣で、一九二五年、男子普通選挙法が治安維持法とともに制定された。

尾崎は一九三三年二月十日、地元伊勢の山田町新高座の弔堂会創設大会に出席した。尾崎の支持者の会は第一回選挙より地元にあつたがはつきりした「弔堂会」は名古屋をはじめ全国各地が先になり、志摩度会が後になつたのだ。昭和恐慌が近づきつつあり、政党の腐敗への批判や軍部の台頭のなか一

九二八年二月、最初の男子普通選挙が実施された。尾崎は定数三の三重二区で、一万九千七〇票を獲得して当選した。

#### 逆風から順風へ

一九三一年八月、尾崎はカーネギー財団に招かれて訪米し、娘二人を連れて前年の五月から同地で病いを養っていた英子を見舞うた。その間に満州事変がおつた。年末にはロンドンに回つた。一九三二年初めには、仏・伊・独・オランダ・ベルギーを歴訪している。二月には第一八回総選挙が行われた。候補者不在にもかかわらず尾崎は当選し、彼の地の人々を驚かせた。五月五日には犬養首相がテロに倒れた。尾崎は七月、バッキンガム宮殿園遊会に妻と娘の四人で出席したが、英子はロンドンで死亡。遺骨を抱えて翌一九三三年二月、軍国主義の吹き荒れる日本に帰国した。

天皇機関説批判などがおこる一九三五年、衆議院は皮肉なことに「帝国憲法五〇周年記念」の祝賀をし、尾崎を功労者として表彰した。一九三六年には二・二六事件がお

きたが、同年十一月、現在の白亜の国会議事堂が完成した。翌年二月には尾崎が久々に登壇して、林銑十郎内閣や軍部の横暴をついたが、もはやそれを倒す力はなかつた。七月に盧溝橋事件から対中国戦闘が本格化した。一九三九年には、欧州で再び大戦の火蓋が落とされた。一九四〇年には近衛内閣が大政翼賛会を結成した。尾崎は政党を否定する大政翼賛会に反対し、日独伊三国同盟にも反対したが、その主張を掲げて登壇しようにも必要な賛同者さえ得られない事態となつていった。

一九四一年に日米開戦、翌年には東条内閣が、国家が推薦する候補のみを保護する「翼賛選挙」を行つた。非推薦の尾崎は、東京の同志の応援演説で、「翼賛選挙は明治以来の立憲体制を脅かす」と批判した。演説の中の、「売り家と唐様からようで書く三代目」というが、日本は憲法があるので三代目になつても米えている」という言葉の前半を、当時の天皇への批判だとかめられ、「不敬罪」で起訴された。八三歳の尾崎は、選挙期間中に三重から東

毅内閣となつたが、一九一七年に米騒動が勃発し、「平民」原敬・政友党内閣が成立した。欧州は終戦した。野党憲政会員となつていた尾崎は、一九一九年三月に出国、米国・英・仏・ベルギー・再度米国の順で、第一次大戦後の世界と、ポトマック河畔の桜とを見て同年末日帰国した。彼は欧州の荒廃に心を動かされ、平和主義へと転換し、対華二一力条要求に賛成したことも反省した。また、男子普通選挙のみならず、婦人参政権支持にもなつた。一九二一年男子普通選挙の審議をめぐって、妥協案を批判したため憲政会を除名された。これ以降は無

京に召還され巢鴨拘留所に一晚留め置かれた。前年に地元囃堂会は解散を決議していたが、この選挙でも尾崎は当選した。そして秘密裁判で自分の政治信条を堂々と披瀝し、一書では有罪だったが、大審院では無罪を勝ち取った。

敗戦前からそれを予測していた尾崎は、休戦宣言や新世界建設に関する論文を用意していた。敗戦後は、にわか尾崎ブームが起きた。また彼自身、一二月に国会で国際連合を押し進めた、世界連邦建設決議」を通した。戦後第一回の総選挙で、自身は戦

時の政治家総退陣論を張っていたのに、地元囃堂会と息子行輝の手で立候補手続きがなされ、三重県全県一区で最高得票で当選した。

その後一九四七、四九、五二年の選挙にも当選した。彼の議会政体論は実現したが、

世界連邦論は米ソ東西冷戦の進展の中、現実味を失った。一九五三年、尾崎の初の落選は全国コースとなった。九五歳だった。亡くなったのは、翌一九五四年である。

### 尾崎の新しいさ

何しろ長命の人だから、足跡をざっと追っただけで、日本近現代政治史になつてしまった。不平等条約改正問題から、二つの大戦を経て、吉田茂内閣批判にまで彼の課題は広がっている。なかつたのは汚職と地元利権の追求である。この点では残念ながらといふべきが、今日の多くの政治家の先を行っている。

彼の選挙は独特だった。演説の日の案内や演説会場のチョウチンには、尾崎行雄先生推薦演説会」と書いてあった。つまり尾崎の不在が前提だ。候補者の録音盤と蓄音機という当時のハイテクと、推薦者の演説が中心だった。また、選挙民が候補者にねだるのでなく、身銭を切ったりボランティアになつたりして選挙運動を盛り上げる「理想選挙」であった。今日の三重県でこうした風潮がよく見えないのは、残念だ。

しかしこの選挙方式は、尾崎というカリスマと崇拜者の間だけで可能だったのかもしれない。今風の手直しをして、普通人の候補者と選挙民との間でも成り立つ形を探さなければならぬ。案外現在首都圏あたりで注目されている地方選挙での「生活者ネットワーク」運動生活クラブ生協を基盤に、女性候補を立てて手作り選挙を行うが、その後継者かもしれない。

彼の女性観は、安政生まれの人とは思えないほど新しい。英子夫人と「立憲的家庭づくりの努力」がなされた。財産・相続・参政も男女平等を説き、産児制限を認め、売買春をとがめ、しかも口先だけでなかつた。一九八九年のメドソン・ブームの頃に買春スキャンダルで失脚した首相がいたことを思つと、八〇年くらいは先取りしている。

尾崎は漢字の煩わしさを嘆いて日本語ローマ字化を唱えていたが日本語ワードプロセッサの登場の予言と言えるかもしれない。平和主義についていうと、冷戦終結後も彼の世界連邦論は実現していない。しかし満州事変に対しての、当時の

国際連盟がもっと毅然とした態度を取っていたら二度目の世界大戦は防げただろうという主張など、今日もかみしめるべき点は少なくない。

注：創業者は苦勞をしていても、二代目・三代目になると慢心して唐様の書などの趣味に走り、身代を傾けるといふ意味

### 参考文献

伊佐秀雄『尾崎行雄』吉川弘文館、一九六〇年  
沢田 謙『尾崎行雄伝 上・下』尾崎行雄記念会 一九六一年  
竹田友三『憲政の人・尾崎行雄』同時代社、一九九八年  
阪上順夫『尾崎行雄の選挙』和泉書院、二〇〇〇年  
尾崎行雄全集刊行会『尾崎囃堂全集』一九六三年改訂版

いわもとみさこ  
人文学部教授・政治学

特集

## 三重における進取の精神

## 伊勢湾と熊野灘のクジラとイルカ

## ——三重県沖の鯨類を調べる——

吉岡 基

はじめに

何年か前のテレビ番組で、三重大学でクジラやイルカの研究をしている教官を登場人物にしたドラマがあったらしい。噂には聞いていたが、私は一度もその番組をみたことがなく、「どんな番組なのだろう」とただ漠然と思っていた。しかし、本人のそんな認識とは無関係に、お恥ずかしい話ではあるが、

「先生がこのドラマのモデルなんですか」とその頃聞かれたこともあった。ある意味で光栄ではあるが本当のところ、筆者はまったくの無関係である。ただ、この時期、筆者の所属する三重大学生物資源学部には、クジラやイルカ両方をまとめてクジラ類（鯨類と呼ぶ）を研究テーマの一部としていた教官が私を含めて四名いた。世の中にクジラ研究を志す学生さんの数は今なお少なくないが、わが国の大

学には、「鯨類研究室」のような海棲哺乳動物の生物学を専門に研究する研究室はまだひとつもないので、学生さんたちは、どの大学、どの学部に進学すればよいのか迷っているのも事実である。そんな状況のなか、同じ大学のひとつの学部（クジラ研究をしている教官が四名もいたのだから、その世界では「クジラ研究をするなら三重大へいきたら」とまで言われていたらしい）しかし、その後、四名中三名の先

生方はご退官や異動で三重大学を離れられてしまった。したがって、現在は生物資源学部では私だけがクジラ類の生物学を研究している人間になってしまったので、「クジラ研究をするなら三重大へ」と言われると正直かなり苦しい。そんな指導体制とは裏腹に、生物資源学部に毎年入学してくる学生さんのなかには、クジラ類の研究をしたいという人がやはり少なくないようである。研究を志す学生さん

の数が多いことは、その分野にいるひとりの人間としては喜ぶべきことではあるが、実際問題、テーマの選択やフィールドの確保といった大きな問題が残っていて、必ずしも学生さんに満足してもらえない環境をあたえているとは言えないのが悩みの種ではある。しかし、クジラ類の研究をしたいという学生さんの数が多いことと直接関連があるわけでもないであろうが、三重県沖の海には、実はすくなくからぬクジラ類が生息している。

## 「三重県の沖の海にクジラやイルカがいる」

「こう言うところ、本当？」と驚く方も多いのではないだろうか。三重大学の学生さんの中にもこのことを知らない人は少なくないように思う。クジラやイルカは、近年、野生動物の中では環境保護のシンボルともなっており、人々の間では概して人気の高い動物となっている。しかし、それらを見るには、水族館はともかく、沖縄や小笠原、あるいは他のどこかのホテルウォッチングスポットやドルフィンウォッチング

スポットに行かないとできないと考えている人が少なくないように思う。しかし、三重県の「前」の海には、実はクジラもイルカもふつとにいるのである。その代表のひとつは、スナメリ(学名 *Neophocaena phocaenoides*) という小型のハクジラ類の仲間(俗にイルカと呼ばれる)の一種であり、もうひとつは、スナメリの十倍近い体長があるマッコウクジラ(学名 *Physeter macrocephalus*) である。以下では三重県沖に生息していることが意外と知られていないこれらの二つのクジラ類について、筆者が行っているフィールド調査の様子をまじえながら、その生態や最近わかってきたことなどを紹介する。

## 伊勢湾・三河湾のスナメリ

スナメリは、背びれがないネズミイルカ科に属するイルカの種類である(図1)。沿岸性が強く、日本では、最近のDNA解析の研究結果も含めて、仙台湾、東京湾、伊勢湾、三河湾、瀬戸内海、響灘、大村湾、有明海に独立した集団が

それぞれ生息していると考えられている(Yoshida et al., 2001)。三重県沖に生息するスナメリはその集団のひとつといつわけである。岸のすぐそばにいて、私たちの身近な海に生息するものにもかかわらず、これまで漁業の捕獲対象にもなっていない。そのため、これまであまり注目されていない。実際、伊勢湾・三河湾にどのくらいいるのか、スナメリがどのくらいいるのかは推定されたのも、わずか七年前のことである。この生息数調査は、伊勢湾・三河湾に面して位置する二つの水族館、鳥羽水族館と南知多ビーチランド、そして水産庁(当時)

遠洋水産研究所および三重大学の共同で実施された。船を使って、伊勢湾・三河湾内を各季節につき一度ずつ目視観察を行い、そのとき得られたデータから、伊勢湾、三河湾それぞれに約千頭、合計約二千頭弱が生息していると推定されたのである(宮下ら、1994)。

そんなスナメリが、三重県の海岸にときどきあがっている。「あがっている」と聞いてすぐにその状況を想像できる方もいるかと思うが、その意味は、生死を問わず、スナメリが海岸に座礁・漂着しているということである。つまり、イルカが陸に「あがっている」のである。このような現象を英語で「ストランディング」(stranding)と呼んでいる。今も「このことばのよい日本語訳がないのであるが、クジラやイルカなどの海棲哺乳動物が海岸に生きてそのまま座礁したり、死んで死体が漂着する現象を総称してさすことばであり、広い意味では、クジラやイルカが本来の生息場所を離れて港のなかにはいってきたり、川をさかのぼってきたりする場合をさすことばもある。この例としては、名古屋港にはいつてきたシャチの例が読

者の記憶に新しいのではないだろうか。

筆者は、このスナメリのストランディングがここ数年少し増える傾向にあるのが実は少々気になつている。筆者の研究室には、近くの海岸でスナメリの死体あるいは生体が発見されると図2、県庁、市役所、その他から、その通報と調査依頼がくる。筆者が現場に出勤できる場合にはすぐに現場に赴くが、無理な場合には、研究室の大学院生などに調査をお願いしている。現場に到着すると、まず種を確認し、性別の判定、体長測定をしたあと、その後の研究に必要な試料を採取する。具体的にはDNA解析に必要な皮膚、環境汚染物質濃度測定用の筋肉や内臓組織(肝臓、腎臓など)とさらに年齢査定用の歯(イルカの年齢査定は、歯にできる年輪によつて行う)や頭の骨などを採取している。そして、試料採取を終えた死体は、埋設するなどの適当な処理をして調査を終える。スナメリのストランディングが多い時期は毎年、春から夏であり、冬はあまりない。筆者が三重大学に赴任して今年で八年

目に入るが、ここ四年ほどはその出勤回数が増えた。近年のストランディングの状況をみると、伊勢湾岸と三河湾岸で毎年四十〜五十件の報告がある。ストランディング件数の増加は、ストランディングに関心をもつた人の数の増加によつて、観察・報告する「目」が増えたことにも起因するので、ここ数年の増加がスナメリ側の生物学的な要因による増加であるとは必ずしも断定はできない。現在、一般にクジラ類のストランディングの原因として考えられていることには、複雑な海底地形、海洋汚染、エサの深追い、天敵、疾病、毒物、超音波による地形探索の失敗、社会的要因、混獲による死体投棄、地球磁場の誤認などがあげられているが伊勢湾・三河湾のスナメリのストランディングの主たる要因がこれらのうちのどれなのか、あるいはこれら以外の他の要因なのかははっきりしていない。近年のストランディング件数の増加傾向や件数そのものをどのように考えるか、それが今の筆者が抱えている大きなひとつの研究課題である。

この原稿を読んでいただいた方

で、お近くでスナメリ(その他のクジラやイルカでももちろん結構です)がストランディングしているのをみつけたら、ぜひ私の研究室までご一報ください(電話059-231-9626・二〇〇二年十一月現在)。

## 熊野灘のマッコウクジラ

次に大きなクジラ、マッコウクジラの話に移ることにする。マッコウクジラは、前述のスナメリと同じハクジラ類に属するハクジラ類最大の種であり、最大体長は十八メートルに達する。そんなマッコウクジラが熊野灘にホエールウォッチングの対象になるほど「いる」。このことも意外と知られていないのではないだろうか。三重県に隣接する和歌山県に、温泉と那智の滝で有名な那智勝浦町がある。その宇久井という町ではマッコウクジラを対象としたホエールウォッチングが地元漁業者によつて毎年春から夏にかけて行われている(図3)。筆者らは、一九九七年からその漁業者の全面的協力を受け、このマッコウクジラの来遊状況と群れ構造を調

べるための生態調査を行っている。具体的には、シーズン中、ウォッチング船がでる限り毎回乗船させてもらい、発見鯨種の記録とマッコウクジラの個体識別用の写真撮影を行っている(図4)。調査初年度には四月末から七月下旬までに約九〇回ウォッチング船が出航したが、そのうちマッコウクジラを見ることができたのは七〇パーセント程度であった。この数字を高いと見るか低いとみるかは人それぞれであろうが、筆者の実感としては、あれだけ大きな野生動物が、閉鎖環境でもない熊野灘でこれだけの確率で

見られることに正直かなり驚いた。しかもときには二十〜三十頭の大きな群れも見られる。印象として中型から小型の個体と親子づれが多い。そして、この初年度に抱いた印象は、五年経過した現在まで大きく違っていない。

一方、この調査とは別に三重大学生物資源学部附属練習船「勢水丸」(図5)を使った目視調査と個体識別用写真撮影調査も行い、ウオッチングが実施されていない秋から冬の熊野灘のマッコウクジラの調査も筆者の研究室では並行して行っている。

これら二つの調査結果から、

マッコウクジラは三重県から和歌山県沖の熊野灘に毎年来遊し、その発見は水深千メートル以深で多い。写真によつて約二百頭の個体が尾びれや背びれの形や傷の違いから識別され、その再発見の様子から、少なくとも一部の同一個体が毎年この海域を訪れている。一部の個体は熊野灘に数ヶ月滞在していることがわかってきた(高橋ら、2001)。今後、さらに継続して調査をすることにより、より多くの個体が識別され、熊野灘になぜマッコウクジラがきているの

かがさらに明らかになってくるであろうし、熊野灘に来遊するマッコウクジラとやはりホトケウゾウツングの対象となっている小笠原のマッコウクジラとの交流関係も明らかになるものと期待している。

## おわりに

三重県が面しているふたつの主な海、伊勢湾と熊野灘には、それぞれにスナメリとマッコウクジラが生息しているということが少しおわかりいただけたであろうか。湾口部はともかく、スナメリが熊野灘の方に大きく南下していることは今のところ知られていないし、マッコウクジラが伊勢湾の中に入ってくることはぶつない。湾内には小さなスナメリが、外洋には大きなマッコウクジラがいる三重県。この原稿を書いていて、大小二つの動物がうまくすみわけているのをあらためて認識し、その二つの動物を調べることにおもしろい環境がとも恵まれていることを改めて感じている。クジラやイルカは、三重県でもごく身近な野生動物なのである。

## 文献

- 宮下富夫、島田裕之、帝釈元、浅井康行、一九九四。伊勢湾・三河湾におけるスナメリの密度分布とその季節変動。平成六年度日本水産学会秋季大会講演要旨集(p.58)。
- 高橋育子、神田正高、石倉勇、内田誠、前川陽一、百瀬修、森恭一、吉岡基、柏木正章、二〇〇一。熊野灘とその周辺海域におけるマッコウクジラの来遊状況。平成十三年度日本水産学会春季大会講演要旨集(p.94)。
- Yoshida, H., Yoshioka, M., Shirakihara, M. and Chow, S., 2001. Population structure of finless porpoises (*Neophocaena phocaenoides*) in coastal waters of Japan based on mitochondrial DNA sequences. *Journal of Mammalogy*, 82(1):123-130.

よしおかもと  
生物資源学部助教授  
海棲哺乳動物学

## 「三重の文化と社会」香良洲町研究の意味

三重大学大学院人文社会科学研究所では、地域社会との研究交流を進めようとの認識に基づいて、平成十三年度に「三重の文化と社会」という講義科目が新設された。フィールドワークを伴う大学院教育の最初の対象地域となつた香良洲町は、三重県の中央部に位置し、歴史文化の名残を比較的よくとどめているため、このような調査研究に取り組みやすい要素を備えている地域である。院生の諸君はそれぞれの研究分野から香良洲町の様々な調査を実施して研究成果をまとめ上げることができた。この間において香良洲町役場の方々をはじめ町民の方々に多大のご協力を頂いたことを感謝したい。ここに掲載される二篇のレポートはそれぞれ地域文化論専攻及び社会科学専攻からの研究成果であり、後者は四名の共同研究の産物である。多くの制約がある中で研究であり、関係各位のご叱正とご指導を希つところである。

科目指導教官

渡邊悌爾

わたなべていじ 人文学部 教授

野中健一

のなかけんいち 人文学部助教授

# 香良洲町の地域特性を活かした活性化策

別所莞至・鶴見雅子・川村敏也・山川退三

はじめに

三重県一志郡香良洲町は、地形的にも行政的にも古くから他の地区から独立した一つのまとまった地域を形成している。このことは地域住民の連帯感の強さを育んできた。しかし近年では、地域産業の停滞や高齢化の進展につれ、地域の活力の低下が課題とな

っている。この町に活気を蘇らせるために、三つのキーワードが重要であると筆者らは考える。それは「ヒューマン」・「地域産業」・そして「イベント性」である。本稿は、香良洲町の地域特性を再評価し、これを活かした活性化策を提言することを目的とする。

第1章 香良洲町の現状と

地域特性

第1節 地域特性

香良洲町は、雲出川河口部の三角州(デルタ)上にあり、二辺を川に、一辺を伊勢湾に面した三角形をしている。自然環境は、海岸線と豊富な水資源に特徴づけられる。遠浅の香良洲海岸は、潮干狩



代表して発表する山川退三氏(35頁参照)



り・楯干しに絶好の場であり、夏には海水浴やキャンプなど大勢の人で賑わう。名物には焼き貝などの海産物がある。海岸線はイヘン卜性をもった資源である。また当町は一般に低湿で、海水・淡水資源に富む。三角州の底辺の東南角には人工的な淡水池もあり、養鰻池が多いが、海が自然に湖水化した潟湖(ラグーン)の地形を利用したものである。沿岸部では地下水に海水が混じった地下水海がある。町の地下水水質測定では、電気伝導率が非常に高く、塩化物イオン濃度も高いという結果が出ている。豊富な水資源の存在は重要な地域資源となりうるだろう。

歴史・文化的側面に目を転じよう。深い森につつまれた香良洲神社は、今なお厳かな雰囲気漂わせる。かつてこの神社には全国から参拝客が訪れた。今も残る香良洲道は江戸時代に参宮の人々で賑わった名残である。民俗行事もよく伝承されている。夏一番の楽しみは、三重県指定無形文化財の「宮踊り」である。宮踊りは、氏神様に前年の収穫に感謝し今年

の豊漁豊作を祈願する奉納踊りである。その他、お木曳き(二十一年に一度の香良洲神社造営のとき)、獅子舞(田遊び)、豊作を祈る神事芸能、毎年正月)、夜がらす祭(香良洲神社の例祭、毎年七月十五日)、茅の輪くぐり(毎年六月三十日の夜に行なわれる神事)などがある。

## 第2節 停滞する地域産業

香良洲町では近年、地域産業の停滞ないし衰退が目立っている。まず各産業の最近の動向を簡単にみておこう。

農業では、総農家数、農業就業人口とも昭和四〇年代以後減少傾向にあり、従事者の高齢化も進んだ。主要作物は梨で、一九九九年の生産量は六一三トンを県内最大の生産高であった。漁業は、経営体数、就業者ともに減少傾向であるが、漁獲量は底引き網漁、船曳網漁を中心に堅調で、水産加工品も堅調に推移している。工業は、一九八〇年代後半からの企業誘致の結果、成長したが、九〇年代中期以降減少傾向にある。主要業

種である食料品製造業の出荷額シェアは八九年の九三パーセントから九九年の六二パーセントへと下がった。商業は、九一年以降、商店数、従業員数、販売額がすべて減少傾向である。地元購買率の落ち込みが激しく、主に津市へ流出している。観光では、入込客数が一九九七年以降、年間二万人を超え飛躍的に増大し、宿泊率が上昇している。町の各種イベントが集客に影響したものと考えられる。観光客はほとんど夏場に集中しており、十月、一月の冬場はほとんどゼロである。

次に、商業に注目して、地域産業の現状と地域の対応をみよう。商店街を対象に現地調査した結果、小規模経営、担い手の高齢化、自動車化への対応の遅れなどの問題点が浮き彫りとなった。商品構成や店舗構成が多様化する消費者ニーズに対応できず、町外への流出率は五九・三パーセントに達している。とはいえ、地元の商業者は手をこまねいているわけではない。具体的な対応として、商工会が中心となり、商品券の発行

や朝市の開催などがある。とりわけ朝市は、毎月第四日曜日九時から十一時頃まで開かれ、各種イベントが実施されて好評を博している。しかし、地元商業衰退を食い止めるまでには至っていないというのが実状である。

### 第3節 高齢化の進展と高齢者の役割

香良洲町では、高齢人口率が一九九六年に一九パーセントで、県全体のそれを上回っている。今後地域社会でますます重要性を高めるであろう高齢者の意識を探るとともに、高齢者の役割を検討しよう。

まず、高齢者の意識を探るため、二〇〇一年八月に高齢者六五歳以上を対象に、香良洲町老人クラブ連合会の協力を得て六五名にアンケートを実施した。設問項目の一部は、三重県が二〇〇〇年に実施した「三重のくにつくり一人アンケート」と同じにした。

県全体の回答に比べ、町民は「とても住みやすい」との回答が断然多く、四〇パーセントにも達

する。住みやすい理由は、「皆顔なじみである」「通過車両がないので安全でのんびりしている」が大きい。生涯教育では、高齢者学級、各種講座、クラブ・サークル活動などに積極的に参加する高齢者は約三〇パーセントが満足、ほぼ満足と答えているが、他方で、満足していない等の回答を合わせると計七〇パーセント以上であった。高齢者の地域での役割を考えると、えで、検討を要する課題である。

余暇の過ごし方で最も多かったのは園芸・畑仕事であった。特産の梨園でも多くの高齢者が働いているが、梨の管理は年中多忙である。この他、様々な産業で高齢者が働いている。現在、ワークシェアリングが注目されているが、高齢者も社会の中で一定の責任を持ち、若い世代と力を合わせて生きていくことが必要であろう。

次に、高齢者の生活と地域実践をみていこう。

第一に、香良洲町では老人クラブの活動が活発である。老人クラブは町内十地区すべてにあり、加

入率は一〇〇パーセントである。クラブの事業の一つは、町内掃除の実施である。町内九か所の草取りやゴミ拾いの清掃を、老人クラブが受託している。いつ訪れても美しい公園の維持管理に、老人クラブの地道な活動があるのである。もう一つの事業として、駐車場管理がある。春夏の潮干狩りの時期には町外の車が多数押し寄せるために、駐車場が設けられ、その管理を老人クラブが担当する。これは、行政から助成を受けていない。駐車場収入から人件費（一人一日二千元）と看板の修理費や経費を引いた金額がクラブの収入となり、九九年度は二四万円余の収入があった。この二つの事業をスタートさせたのは現香良洲町老人クラブ連合会の会長、倉田勇氏である。氏は元香良洲町漁業組合長であり、経営感覚に優れたリーダーシップのある人物と感じられる。地域の町おこし、村おこしにはこの様なリーダーの存在が大きなポイントと思われる。

第二に、高齢者と若い世代の交流が盛んで、伝統の継承がなされ

ている。八月十五日の宮踊りには、地区の男子が高校一年生になると参加できる。彼らはこの祭りに参加することによって大人の仲間入りをする。この祭りは住民に親しまれており、祭りを通して高齢者から若者に伝統が継承されている。

第三に、町の福祉と文化の中心的施設として一九九四年に設立された「サンデルタ香良洲」と特別養護老人ホーム「フルハウス」がある。前者はデイサービス設備、娯楽設備、浴室等を備えており、毎日五〇～六〇名の高齢者が集まっている。ここを中心として高齢者の生活を支援する町民の活動が、地域の暮らしを活性化する原点となりうるだろう。一方、後者はショートステイ〇床、特養二〇床、三〇名のデイサービスを受け入れられる施設として二〇〇〇年に開設した。いずれも高齢者が健康に暮らし、そして介護が必要となっても安心して暮らすために、不可欠である。

香良洲町の高齢者は、地域のために一定の貢献をしている。社会

表1 海面養殖と陸上養殖（かけ流し式・循環式）の特徴

区分・項目	海面養殖	陸上養殖	
		かけ流し式	循環式
残餌、排せつ物の処理	海洋へ廃棄	ポンプによって水槽外へ排出	水槽内で浄化・汚染防止
気象による影響	赤潮、天候に左右される	影響をうけない	影響をうけない
水温上昇による影響	直接受ける	受ける	エントロール可能
生産性	普通	高い	最も高い
社会性	比較的きつい	高齢者の雇用の場となりうる	高齢者の雇用の場となりうる
運転コスト	餌代、油代	餌代、電気代	餌代、電気代
設備投資	比較的安い	循環式より安い	初期投資必要
地下海水の利用	-	可能だが不向き	可能(水温を一定に保持)
その他の特徴	従来型の方式	生産性は高いが水温コントロールと環境面で難しい	水産庁の支援がある持続的養殖生産環境創出型養殖技術ヨーロッパで定着

と接点を持つことは高齢者自身の生き甲斐にもつながる。高齢者を受け入れ、安心して暮らせるように配慮することは、高齢者が次世代に自分たちの知恵を引き渡す土壌を作ることになる。活気ある町で引き続き彼らが住み続けるために、今こそ自然豊かでふれあ

いや連帯感の強い町に生まれ変わる方策が望まれる。

## 第2章 活性化に向けた提言

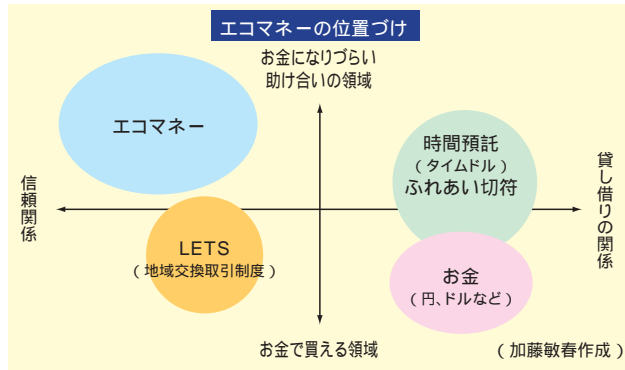
### 第1節 陸上養殖業の振興

地域特性を活かした活性化策の一つとして、循環式陸上養殖業の振興を提言する。

日本の漁獲高は近年減少しているが、養殖の割合は年々上昇し、一九九九年には一九・九パーセントに達した。日本の養殖業は、海面養殖、かけ流し式陸上養殖を経て、循環式陸上養殖の時代へと変わった。水産庁は、九八年に有機物を海洋環境へ一切放出しない環境創出型養殖技術の開発事業を開始した。各方式の特徴は表1に示す通りであり、循環式陸上養殖業は今後の成長を十分に期待することができる。

では、香良洲町における循環式陸上養殖業の可能性を検討してみよう。地域的条件をみると、一定の広さの土地が必要で、旧海軍跡地などの遊休地を利用できる。豊富な海水が必要とされ、地下海水を含む水資源が活用で

図1 エコマネーの位置づけ



きる。労働力には漁業経験者が最適であるが、高齢漁業経験者を中心とした熟練労働力と養殖業の経験者が存在する。漁港を養殖魚の出荷基地として利用できる。近隣に三重大学、三重県科学技術振興センター水産研究部といった学・官の研究機関があり、産学官の連携が可能である。したがって、香良洲町には、循環式陸上養殖業を成立させる多

くの条件が揃っていると見えよう。一方で、資本が今後の最重要課題である。生産組合方式で陸上養殖事業を立ち上げた例もあるため、あらゆる可能性を検討する必要がある。

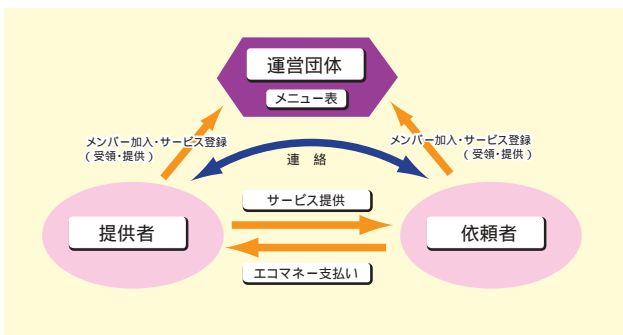
陸上養殖業は、集客産業としても位置づけられる。そこでフィッシュファーム構想を提案する。養殖で育てた魚を用いた釣り堀を整備すれば、親子で釣りが出来る施設として、観光客の少ない冬場にも集客が可能となり、買い物客の増加にも結びつくであろう。

### 第2節 地域通貨の導入

次に、町内のすばらしいふれあいと連帯感に着目し、地域通貨(エコマネー)の導入を提言する。

日常使われる貨幣は、投機的な売買の対象となっていて、アジア通貨危機のような弊害を招く恐れをもつ。それに対し、地域通貨とは、物やサービスの交換手段という本来の役に立ち返った貨幣で、九〇年代以降、世界各地で増えてきた。地域通貨は、域内での物やサービスの取引を活発にし、

図2 エコマネーの仕組み



住民の結びつきを強める一方、世界規模で起こる通貨危機から最低限の暮らしを守るという意義もある。現在、世界中で二千五百以上の地域通貨があるといわれている。すでに日本では七〇年代以降、介護等のボランティアの見返りとして、自分や家族のために応分のサービスを受けられる、ふれあい切符「や」、時間預託」などの

制度が、いくつもの団体によって導入されている。米国の「タイムドル」と同様に、時間を基準にした貸し借りの仕組みであり、農村の伝統的な「結い」や「手間換え」という相互援助の制度に通じるものである。(図1)

こうした地域通貨の中でも、とくにエコマネーに注目したい。エコマネーは、限られた地域や仲間の中で、値段を付けにくい手助けや環境、福祉、コミュニティ、教育、文化などに関する貸し借りをしたとき、その対価として使おうとする。いわば「ありがとう」の言葉が貨幣に姿を変えたものである。

エコマネーは、以下の特徴をもつ。地域の生活者自身が発行し、生活者主体の組織で運営される。単なるスタンプシールやポイントカードの機能の代替ではない。エコマネーで地元商店などの商品代やサービスの一部に充てることもできる。サービスメニューの登録が必要である。「してほしいリスト」としてあげられる「リスト」が冊子やインターネットなどで配布される。貯めても利子はつか

ない。エコマネーを保有するだけでは利益を生まない。エコマネーと現金の交換はできない。現金で表せない「思いやり」や「感謝の気持ち」を表すものだからである。

エコマネーの値づけは取引する生活者が行う。一時間当たりのサービスに対する価値が基準になるが、「思いやり」や「感謝の気持ち」を表す場合は付加的なエコマネーが払われる。一定期間(三ヶ月、六ヶ月など)経過すると振り出しに戻る。つまりエコマネーには有効期限があるが、それはエコマネーでの取引が債権債務関係ではなく、メンバー間の信頼関係に根ざすからである。

エコマネーの仕組みは、次のようである(図2)。まず、住民、行政、企業、各種NPO、組合等の共同イニシアティブにより、エコマネー運営団体(NPOなど)が設立される。エコマネー運営団体は、運営責任者と、それから運営を委託された記録調整者により構成される簡素なネットワーク組織である。有効期限後に振り出しに戻る際、残高がプラスで期間中活発

に取引した人に対しては、地域のエコマネー運営団体や「エコマネー・ネットワーク」から表彰が行なわれる。エコマネーを受け取った住民は、それを活用して、新たにサービスを交換することができる。また、受け取ったエコマネーを高齢者や福祉関係団体に譲渡して、その高齢者や福祉関係団体が介護サービスを受ける場合に活用することができる。

エコマネーの取引を促進するためには、メンバー間の信頼関係が前提となる。そのため、メンバー同士の定期的な交流会「からす市」によるエコマネー・フェスティバルなど)などを通じて、信頼関係の醸成に努めることも必要である。

香良洲町における具体的なエコマネーの導入方法(案)は、次頁の表2のようである。エコマネーは香良洲町の活性化を支援するツールであり、「ヘトウマン」や「地域産業」や「イベント性」の三点を重視したものとなっている。なおエコマネーの名称は、「デルタ」である。三角州に位置する香良洲町

を象徴する語として住民に親しまれるであろう。

「エコマネー」は、「温かいお金」として多様なコミュニティを形成し、信頼を創造するものである。二〇〇一年四月現在で日本全国百を超える地域で導入されている。「エコマネー」「デルタ」の導入は、香良洲町の活性化の契機になるものと期待している。

むすび

香良洲町は、自然豊かで住民の連帯感の強い、住みやすい地域である。本稿ではこうした地域特性を活かして、具体的な活性化策を提言した。その際「ヒューマン」、〈地域産業〉、「イベント性」の三つのキーワードが重要であると考えた。第一に、循環式陸上養殖を新しい町おこしの産業と位置づけ提言した。これにより、雇用の確保に加え集客力の増加が期待できよう。また第二に、地域通貨の導入を提言した。これは、地元商業の活性化だけでなく、元氣ある高齢者による歴史的文化的の継承や、各施設の運営などの地域コ

ミュニティの創造のツールとして、エコマネーが活用できると考えたからである。

香良洲町は自然環境や歴史文化に恵まれているとともに、人々の温かさが感じられる町である。この町の活性化にこの提案が少しでも寄与することを願っている。

【参考文献】

- 『第三次香良洲町総合計画』一九九三年三月、香良洲町
- 『香良洲町史』一九九一年、香良洲町
- 『平成十年買物動向調査』一九九九年、三重県
- 『公共用水域及び地下水の水質測定調査』一九九七年七月、三重県環境安全部
- 『三銀レポート』No.12、二〇〇一年九月、第三銀行調査部
- 『養殖一九九九年四月号』一九九八年五月、緑書房
- 『漁業白書』二〇〇〇年度版、農林統計協会
- 『エコマネーの世界が始まる』加藤敏春、二〇〇〇年十一月、講談社
- 『エコマネーの新世纪』加藤敏春、二〇〇一年二月、勁草書房

- 『あたたかいお金、エコマネー』加藤敏春、二〇〇一年六月、日本教文社
- 『地域通貨の試み全国』二〇〇一年十月九日、『日本経済新聞』
- 『地域通貨エコマネー』二〇〇〇年十一月一日、『中日新聞』
- 『大阪マネーでまちづくり研究会』(二〇〇〇年度活動報告書)二〇〇一年三月(株)松阪街づくり公社

人文社会科学研究所地域文化論専攻  
べっしょかんじ  
人文社会科学研究所社会学専攻  
つるみまさこ  
かわむらとしや  
やまかわたいぞう

表2 エコマネー『デルタ』の導入方法(案)

キーワード	対象	仕事の内容	マネー
ヒューマン	伝統の継承(宮踊)	祭りの指導	5デルタ支給
		参加	1デルタ支給
	少子・高齢化社会のあるべき姿	子守り	5デルタ支給
		老人の話し相手	1デルタ支給
		庭木の剪定	10デルタ支給
		各種指導	5デルタ支給
		清掃作業	5デルタ支給
	サンデルタ香良洲	留守番	10デルタ支給
		利用者	1デルタ支給
		パソコン相談	10デルタ支給
将棋の相手		3デルタ支給	
潮干狩り見張		10デルタ支給	
地域産業	「からす市場」	海水浴見張番	10デルタ支給
		買い物同行利用者	3デルタ支給 5デルタ支給
イベント性	特産物の利用	梨狩りの監視	10デルタ支給
		参加費	15デルタ支給
		潮干狩り参加	30デルタ支給
	川と海の自然の利用	楯干し参加	30デルタ支給
		海水浴参加	30デルタ支給
歴史資料館(若桜会)	案内等	5デルタ支給	
	見学	2デルタ支給	

特集

## 香良洲町の研究

## 中世矢野の湊と機能

伊藤裕偉



発表する伊藤裕偉氏(35頁参照)

## はじめに

香良洲町域は、中世では「矢野」と呼ばれており、ここに湊があったことがいくつかの文献から知ることができる。  
中世の矢野に対しては、『香良洲町史』をはじめとする研究があ

るが、湊の形態とその機能の追求はあまりされていない。矢野は伊勢平野のほぼ中央に位置するが、中世の伊勢には桑名・安濃津・大湊・泊鳥羽などの大規模な拠点の湊が数多くある。とくに安濃津と矢野は至近距離である。人や物資は大規模湊に集中する

ので、その近隣にある小規模湊の存在は軽視されがちである。しかし、後述のように矢野は恒常的な海関が置かれるほどの場であり、その存在意義は高い。中世矢野の湊を解明することは、一般論としての中世湊を考えるうえでも極めて重要なことといえる。



第一図 正保国絵図(鎮国守国神社所蔵)『三重県史』別編より部分引用  
正保元年(1674)の江戸幕府の命により製作されたもので、これは元禄期の写しである。一志郡の村名が赤丸内に表現されており、中央を雲出川が流れる。雲出川河口の三角洲が矢野。その北部の津市藤方付近には、今では見られない入り海が表現されている。

### 1 文献史料から見た中世の矢野

#### a 「浦」と湊

中世の文献史料に見える矢野には、単に「矢野」とある場合のほか、「矢野浦」や「矢野崎」といった表現もある。「浦」は、今では波打ち際や白砂の海岸線と考えてしまいが、中世では少し異なる。永正七(一五一一)年四月一三日付の史料には、内宮(伊勢神宮)の「神船」である蔵一丸が、「浦々泊々」で他役、つまり税金を掛けられることの無いよう申し出たことが記されている。明心永正宮務記『三重県史』史料編中世(上)。「泊」は湊を示すことばで、鳥羽市にはこの一字で「とまり」と呼ばれた湊があった。それと並べて書かれている「浦」も同様に、中世の湊を示す言葉なのである。

#### b 矢野と海関

矢野には海の関所(海関)が置かれていた。史料上で確認できるのは、文明五(一四七三)年、文明一二年(一三三〇)年、そして文明一七年である。『氏経神事記』大神宮叢書「神宮年中行事大成前編」、内宮引付「氏経脚引付」『三重県史』資料編中世(上)。

文明五年六月日付けの史料に

は、伊勢海(伊勢湾)を往来する小廻船(しょうかいせん)神船(しんせん)に新警固(しんけいこ)が課税(かぜい)されたことについて、外宮(うへみや)伊勢神宮(いせじんぐう)の神主(しんぬし)がそれを停止するよう求めたことが記されている。「警固」とするのは、舟の安全を保障する(海上警護)名目で税を徴収するためであろう。その対象として、矢野の他に安濃津(あのつ)津市(つし)・若松浦(わかしらうら)鈴鹿市(すずか)若松町(わかしら)・北永江(きたなが)鈴鹿市(すずか)長太町(ながた)・四ヶ市(よつし)庭浦(にわうら)四日市市(よひいち)市市(ちち)用福浦(もちふく)四日市市(よひいち)市市(ちち)茂福町(もぢふく)・今答志(いまこたし)鳥羽市(とりは)答志町(こたし)が記されている。

この段階で新たに海関がたてられたのは、時の領主権力による地域支配の進展が背景にある。関所を設けるのは、そこで人や物など、頻繁な往来があるためである。その場所のひとつに矢野があることは、ここが大変に活気づいた湊であったことを物語っている。

また、同じ史料の矢野には、本一、今二加之」と割註がある。つまり、矢野には海関がもともと一ヶ所あり、文明五年にはそれが二ヶ所に増やされているのである。二ヶ所の関所を持つことで著名なのは、兵庫津(ひょうごつ)兵庫郡(ひょうごぐん)神戸市(かたひら)戸市(とち)である。兵庫津には北関・南関の二ヶ所があり、それぞれ湊の北と南と

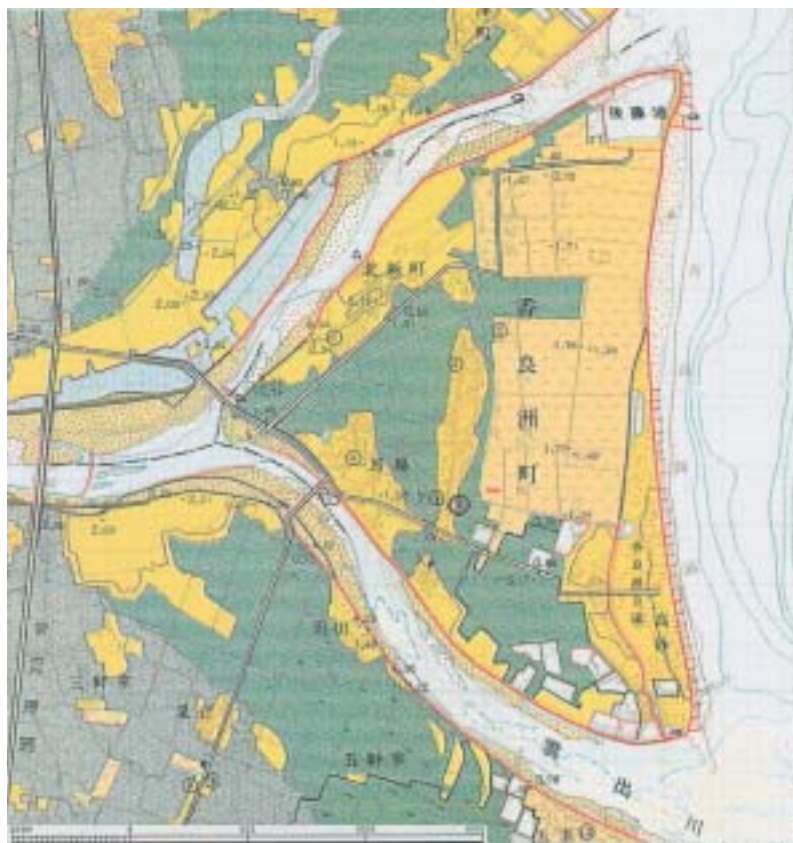
に設置されていたものと考えられる。二ヶ所の海関とは、湊への入り口が二ヶ所以上存在していたことを示している。

#### c 海関の設置者

文明五年六月日の史料から、安濃津(あのつ)に海関を設置したのは長野氏(ながの)現在の安芸郡(あきの)美里村(みさと)北長野氏(きたながの)本拠(ほんこ)としていた国人領主(こくにんりやうしゆ)であることが確認できる。今答志(いまこたし)を除き、安濃津(あのつ)以北の五ヶ所は、長野氏の権力(けんりき)を背景に設置された海関である。では、矢野はどうか。

文明年間、矢野に設置された海関に北畠氏(きたはたけ)が関与(かんご)していたことは史料(しりょう)上で確認できる。文明一二年以降(いご)、北畠氏(きたはたけ)の被官(ひくわん)が関係した新たな海関が問題となっている。しかし、だからといって文明五年以前(いぜん)まで北畠氏(きたはたけ)関連(かんれん)と早急(そうきゅう)に判断(はんぱん)することはできない。

享徳四(きやうとく)一四三五(しよん)年五月一三日付けの熊野那智大社(くまののち)大社(おほやしろ)那那売券(ななうり)券(せう)『熊野那智大社文書』三三八、史料(しりょう)纂集(さんしゅう)』三)からは、矢野(やの)が七つ(しち)の郷(むら)村(むら)で構成(こうせい)されているという興味(きょうみ)深い事実(じじつ)とともに、矢野(やの)の地頭(ぢちゆう)が長野一族(ながの)の伊藤(いとう)・工藤(こうとう)であることが記(き)されている。このことから、一五世紀(じゆ世紀)中葉(ちゆうが)の時期(じき)に矢野(やの)を支配(しはい)していたのは、安濃津(あのつ)と同様(どうよう)に



第2図 香良洲町周辺の土地状況(国土地理院発行『土地条件図』松阪より)

香良洲町内には高砂地区と小松地区の2ヶ所に砂堆があり、馬場地区や川原地区付近は自然堤防であることがわかる。高砂地区北方の薄黄色は埋め立て地である。

長野と考えられる。海關の設置者と地域支配者(ここでは地頭)が同じ権力者とは断定できないが、文明五年の矢野に新たに海關を設けたのは長野氏である可能性を考えておく。

以上の状況は、矢野の地が長野氏と北畠氏との権益がせめぎ合う

場所であったことを示している。雲出川上流の多賀一志郡美杉村(を本拠とする北畠氏)にとって、その河口である矢野を押さえることは極めて重要な意味を持つていたと考えることができよう。

北畠氏のそういった思惑は、最終的には達成されたと考えられ

る。一六世紀中葉頃と考えられる北畠具房判物(澤氏古文書『松阪市史』第3巻)には、北畠氏の被官である澤伊予守が何らかの合戦に赴くに際し、「当年の儀」という限定付きながら「矢野衆」をその配下として記されている。この史料から、北畠氏がそれぞれの村落単位に支配を行っていたことが読みとれ、矢野には「矢野七郷」といった単位で支配を浸透させていったのである。

北畠具房は一六世紀中葉頃からその滅亡期までの北畠氏当主である。文明一七年代階からは六〇年ほどの開きがあり、その間の矢野の状況は残念ながら不明である。しかし、大永二(一五五二)年八月に当地を訪れた連歌師宗長は、その日記に「雲津川阿野の津のあなた、當国牟橋の境にて、里のよも絶えたるやう也」と記している(『宗長手記』、『群書類従』第一八輯)。一六世紀前葉の当時、雲出川を境に「牟橋」と「つまり合戦を執り行うのは、長野氏と北畠氏であると考えてよい。したがって、ちょうどその境目に位置する矢野は、一六世紀の前葉頃までその帰属を争われたと見られる。

このように、矢野での権益が最終的には長野氏から北畠氏に移行したことを確認することができ。しかし、それは文明年間以降、長野氏との熾烈な争奪の結果であった可能性が高い。裏を返せば、矢野の権益を手中に収めることは、双方にとって極めて重視されていたといえよう。

## 2 中世矢野の地形

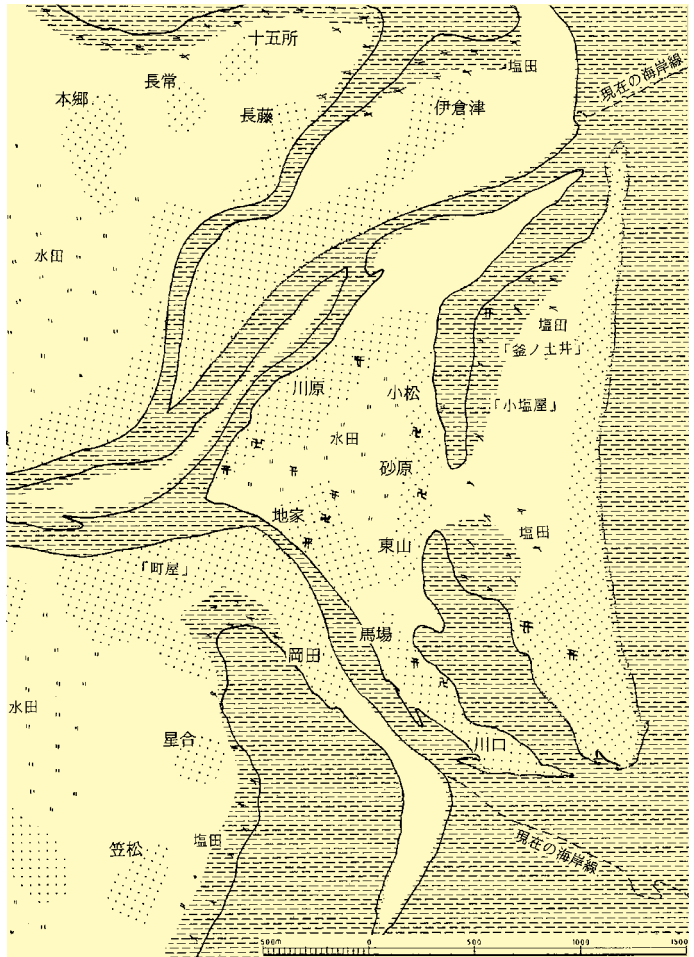
現在の香良洲町は雲出川河口部に出来た見事な三角州をなしている。では、中世はどうであろうか。私は以前、平野部に形成された微地形と地名の検討から、安濃津の旧地形を復元した(伊藤一九九九)。中世における矢野の地形を考えるにあたり、今回もそれを応用するかたちで考えてみたい。

まず、近世に作製された絵図を見る。第1図に『正保国絵図』を掲載した。『正保国絵図』は一七世紀中葉頃の成立で、中世の環境に近いものと評価できる。この絵図には、雲出川河口の北部、現在の津市藤方(ふじかた)付近に入り海が表現されている。干拓される中世以前にはこの入り海は「藤漏」と呼ばれ



ていたと考えられる。  
この図をより詳しく見ると、藤瀨の北岸部が櫛歯状に表現されていることが読みとれる。これは、海岸部に形成された砂堆（砂州）の大規模なものである。つまり、入り海に食い込むようにある砂堆に、湊の船着き場や町があったと考えられる。

では、同様な視点から矢野につ



第3図 中世矢野の景観推定図

微高地をドット、水域を破線のトーンで示している。

いてはどつ読みとれるのか。第1図では、今の香良洲漁港付近と香良洲神社の南部あたりに小さいながらも入り海が表現されている。これが先に見た藤瀨と同じ性質の入り海である。

まず、南部の状況を見よう。第2図では、現在の砂原・東山集落と香良洲神社から香良洲公園にかけての二ヶ所に砂堆がある。入

り海はこの二条の砂堆間に存在していたと考えられる。香良洲町の旧小字を見ると、この付近に「前の洲」「長池」「砂ノ浦」地名があり、砂堆や入り海に関係した地名と考えられる。以上のことから、砂原集落の南部東側と東山集落部分の東側は、ちょうど入り海の沿岸部に相当することとなる。町屋を伴った湊町が形成されるとすれば、土地の安定度や西部に位置する馬場集落への接続から考えても、砂原・東山集落部分であろう。

つぎに、北部の状況を見る。現在の香良洲漁港付近の旧小字は「北新田」で、干拓地であることがわかる。近世絵図の入り海がどの範囲にまで及ぶのかは南部ほど明確でないが、字北新田の南西に「北川」の小字があり、位置的に見ると、入り海は小松集落の北端部付近にまで及んでいた可能性は高い。

小松・東山の砂堆よりも東側の地域は、この砂堆と香良洲神社の間よりも安定した土地と考えられ、比較的細かな字割りが見られる。中世の段階にこの部分は基本的には陸地化していた場所と考えてよいであろう。

入り海がある砂堆間は旧小字名に「釜ノ土井」や「小塩屋」などがあり、塩田とそれに関わる施設が存在していたと考えられる。齋藤一九九九。一二一―一四世紀頃の神宮領が記載されている。神鳳（じんぼう）の「群書類従」第一輯の一志郡の項には内宮矢野箱木御園一石、外宮三石、塩雑用三石」とあり、神宮領に関するいくつかの書き上げを見ると、近隣の藤方・焼出（津市米津）・嶋抜島貫などは塩を上納する御厨・御園として記載されている。また、矢野地内は、太閤検地帳に「北釜」「中釜」「小塩屋」の地名が見られ、「北釜」「小塩屋」は明治頃にも旧小字として残っていた。

以上のことをまとめ、中世矢野の地形と矢野に関わって想定できる関連施設を記載してみたのが第3図である。先に見た矢野の二ヶ所の海関とは、二つの入り海が入港部となることに起因すると考えられる。入り海の周囲には、字名「釜ノ土井」「小塩屋」が示すように、塩田が広がっていたと考えられる。地家集落の北部は田畠と考えられる。湊町の本体は、現在の小松・砂原・東山集落部分の砂堆であろう。

なお、現在の雲出川は、北流部

を雲出川古川、南流部を雲出川新川と呼んでいる。『正保国絵図』にはいずれの流域も描かれていることから、少なくとも江戸前期までには今の位置に定まったのであるが、それが厳密にどの時代なのかは特定し難い。ただ、前出の土地条件図<sup>5)</sup>や高橋学氏の研究(高橋一九七九)など、いくつかの地理学的検討からは雲出川下流部の旧河道は複数確認されている。大きな堤防ができない限り、下流部は幾筋もの流路が同時にあつた可能性は高いであろう。土地条件図<sup>5)</sup>やその他の地理学的な検討資料を見る限り、香良洲地域の地形と隣接する津市・三雲町との間に不自然なつながりは見られない。雲出川新川は、中世にも存在していたと考える。ただし、現在ほどの幅員は無かつたかも知れない。

### 3 中世矢野の地域的意義

中世の矢野には長野氏や北畠氏といった時の領主権力が大きく関与していた。それらは、神宮領箱木御園の存在や伊勢海小廻船と神宮との関わりとに見られるように、長野氏・北畠氏の関与は神

宮権益とのせめぎ合いのなかで発生してきたものである。つまり中世矢野の湊機能は、人と物の動きに対する神宮の支配機構が根底にあると言つことができよう。文明五年以前から矢野に海関があつたことは、伊勢海小廻船の動きのなかで、矢野に海関を置くことが大きな権益につながるという背景、つまりは矢野において神宮側物資の集散が執り行われていたことを示すのではないだろうか。

こう考えた場合、雲出川河口部に位置する当地の集散機能の第一として、雲出川上流部の木材を想定しておきたい。木材を中心とした集散地としての機能が、中世矢野が持つ湊としての第一義的意味であつたのではないだろうか。また、矢野近隣で生産されていた塩も重要な商品と考えられる。

二ヶ所の海関を入り海との関係で見ると、北側は伊勢北中部と、南側は伊勢南部との舟運と関連しているよう。二ヶ所の海関を設定することで、雲出川水運の要から伊勢湾の南北への物資集散を確実に押さえることが可能となる。

なお、矢野に対する支配は物流のみではない。雲出川を挟んで長

野氏と北畠氏は対峙する。矢野を確保することは、雲出川の流通を掌握する意味だけではなく、相手側の領域に対する前線基地を設けたにも等しいこととなる。

矢野の地域的意義は、以上の二点を考えておきたい。いずれも、矢野の地勢を背景とした重要な意味を持っていると考える。

### おわりに

中世矢野は、湊としては決して大きくない。しかし、そこは伊勢神宮、あるいは長野氏・北畠氏の食指が常に動く重要地であつた。矢野は、桑名・安濃津・大湊などの大規模な湊を擁する伊勢湾西岸部のなかにあつてもなお存在する小規模な湊の意義を鮮やかに示しているのである。

#### 〔文献〕

高橋 学(一九七九)『先史・古代における雲出川下流平野の地形環境』、『人文地理』第三一卷(第二号)

稲本紀昭ほか(一九八八)『三重県の地名』日本歴史地名大系第二

四巻(平凡社)

飯田良一(一九八八)『文明年間における伊勢湾の警固と廻船』、『三重県史研究』第四号)

岡田文雄ほか(一九九一)『一志郡香良洲町』、『角川日本地名大辞典』

香良洲町編(一九九三)『香良洲町史』

齋藤直樹(一九九九)『香良洲西山遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター)

伊藤裕偉(一九九九)『安濃津の成立とその中世的展開』、『日本史研究』四四八)

いとつひろひと

人文社会科学研究所地域文化論専攻  
日本中世史

## 「三重の文化と社会」報告会

2002年3月5日に香良洲町の「サンデルタ香良洲」において、大学院科目「三重の文化と社会」の報告会が開かれました。

同日18時から19時35分まで、7件が発表されました(下記囲み記事参照)。休憩の後、質疑の時間がもたれ、21時過ぎに成功裡に終了しました。参加者数は約80名でした。



発表会場、サンデルタ香良洲



会場風景

### 発表内容

- 「雲出川流域における塩の生産と流通」  
 (山田智真・三品典生)  
 「南北朝時代における伊勢国一志郡矢野村領主  
 矢野氏の立場について」(石川匡伸)  
 「中世矢野の湊と機能」 (伊藤裕偉)  
 「江戸時代における香良洲の陸上交通の様相」  
 (鴨頭俊宏)  
 「近世末期矢野村をとりまく人的つながりに  
 ついて」 (上野周子)  
 「三重海軍航空隊の立地とその選定」(寺嶋吉明)  
 「『香良洲町の地域特性を』活かした豊かな社会  
 を目指して」  
 (山川退三・別所莞至・川村敏也・鶴見雅子)



発表者控席

# 三重から世界へ 世界から三重へ

## 伊勢神宮

過去、現在、未来の合一する姿

南アフリカ大学美術史学科

エステル A. マレ (Estelle A. Maré)

内宮(図1~3)および外宮(図4~5)を中心とし、伊勢神宮と総称されるもつとも神聖なる三重県伊勢の神道建築群は西洋においてそれほど知られてはいない。日本の寺院、神社、城郭に一章を割いているような西洋の建築史の書物においても、伊勢は通常いくらかの説明を添えた内宮本殿の例が与えられている程度である。神社の建物が20年ごとに隣接する場所に建て替えられ続けているという事実は語られることが多い。【しかし、】主要な社殿と副次的なそれらの建築様式に関する記述は、ひさしの突き出た急傾斜の葺き屋根、主室の高床構造、壁となる軽量木材による間仕切りなどに限られ、これにこれらの社殿の原型が葺き屋根と脚柱を伴う日本古来のテント型の小屋にある、といった説明が伴うのがせいぜいである。社殿やその境内の囲いの配置が基本的に対称性を持っていることから、日本的な考え方・ものの設計は、周りの環境の持つ自然な形態とは対照的な極度の形式性の特徴としているとも言われる。【こつこつした】様々な記述や歴史的事実も軽んずべきものではないが、本稿の目的はそのような記述をすることでではなく、宗教建築の一つのユニークな具現例としての伊勢神宮が持つ意味を解釈することを主眼としている。この目的に沿って、日本の建築家丹下健三と川添登が彼らの伊勢についての著書

の中で表明している考えを引くこととしたい。ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーはすべての真正なる建築に具現するであろう「天と地と人と神性の統一」という「四辺界」(原語は *cosmological fourfold*: この語の訳に関しては末尾の訳者註記を参照していただきたい)なる概念を仮設しているが、日本建築とその文化的文脈の原型としての伊勢に関する丹下と川添の見はこのハイデッガーの定式化する理論的洞察からも裏付けられるものである。

伝説によれば、伊勢内宮は垂仁天皇(二四九・二八〇)の治世に創建されている。垂仁の娘、ヤマトヒメ皇女(倭姫命(やまとひめのみこと))は大御神を崇め奉るにふさわしい場所を求めて各地を巡った。ヤマトヒメが伊勢の地にやってきました時、次のようなお告げを受けた。「この地は激しい嵐の吹かぬ土地、弓のしなる音、矢のうなる音の聞こえぬ平和な土地ゆえに、私はこの地にやすらぎたいと思う。」そこで、ヤマトヒメは日本の皇統の祖にして国の守護として崇拜されていたこの大御神、太陽の女神、アマテラスオオミカミ(天照坐皇大神、あまてらすおおみかみ)の御神あまてらすおみかみ【】の為の神社を建立した。この女神は、内宮の本殿で、日本の三つの聖なる宝【三種の神器】の一つである聖鏡八咫鏡

（やたのかがみ）を住処としていた。この鏡は、その日本への到来を憶い起こさせるべく、本殿の中央の柱の上方に据えられた長さ約二メートルの舟形の容器に収まっている。

伊勢の社殿に使われている構造材は主としてヒノキ【原文ではcypress = 西洋系杉】とcedar = ヒノキヤ杉】の二語が使われている【と屋根葺き材であり、これにいくらかの金属装飾が付随する。彫像とか奥を押し量らせるような入り組んだ空間とかがしつらえられているわけではないが、洗練された精細さが強く人の注意を引きつける。しかしながら、伊勢内宮、及び、そこからおよそ四キロメートル正確には六キロメートルとも】に位置する外宮を論じるにあたっては更に奥底にある意味を求めざるべきであろう。秩序を産み出すとする人間達がいることを、地上のこの場処に棲むよう招じられた神々の目に見えるものにしよつとする建築的な努力を、この二つの神社は体現しているのである。内宮と外宮の設計には山や森や空の存在を鋭敏に感じ取るうとする意識が色濃く残り、今なおそこに神道という宗教の起源を感じ取ることが出来る。大地の要素たる石や木や水と、空に属する空気や風との間の自然な関係をとらえたその建築形態を樹々や滝、その他伊勢神宮の各敷地を

囲む様々な自然の事象が補充している。

内宮へは五十鈴川を跨ぐ木橋を通つて向かうことになる。その橋の尽きるところで鳥居が、今まさに神道の聖域へ立ち入ろうとしているのだということを知っている（図8）。垣に囲われた社への経路は小石で舗装されており、これが訪れる者の歩みにザクザク【zakuzaku】という音を生じせしめ、その歩みの踏みしだく不浄な空間部分は神々の聖なる空間とは画然と区分されているのだということを通しして思い起こさせるようになっている。伊勢神宮のすべての境内のいたるところに神々の住処として敬われている石や岩がある。これらの石は大いなる芸術美を有する伝統的日式石庭のさきかけであり、古しえの日本人達は、これらの石の中に、自然と自然現象の内部に棲みついている何が神秘的なものを見出す（Tange 1965: 25）ゆえに、象徴的な意味を横溢させている。伊勢神宮のこれらの石は道の両側に沿って縄と白いひらひらとした紙片でもって周囲から遮断されている。これによつて石は一段と人の目を引くものになるとともに、これは神道信者達が自然界の事物に注いできた慈しみと敬いの念を如実に示している（図9）。

明確に境界を定められた敷地内における建造物の配置は、それぞれの神が超自然界の序列においてどのような位階にあるのかを象徴するものであった。奈良時代（六四五・七九四）にあつては、内宮は主聖殿と東西の宝物庫に加え、七十の副次的な建造物を持つていた。四七八年に創建され、穀物の女神トヨウケノオオカミ【豊受大御神】とよけのおおみかみを祭る外宮はそれより控えめで五十の副次的建造物を持つていた。神宮社域のこの大きな広がりには、当時の祭礼の壮大さや、また、そこに住む神々と想定されていた豊かで多様な存在の壮大さを証している。現在では、両宮は四つの方形の建物のみから成り立っている。正殿、最も奥の柵垣【原語はence: 伊勢神宮では御垣と呼んでいる】の内側の二つの宝物庫、そして、第二と第三の柵垣の間にある神官たちの会所である。およそ十八メートル×三十九メートルの平らかな整地を囲む柵垣と更に三つの内部の柵垣は今なお聖性の序列を截然と画している。このように、これらの社殿は八〇四年にさかのぼる文書『皇大神宮儀式帳』における記述に似た姿を今もとどめている。

内宮の主たる社殿【正殿】の内部はもともと人間を収容するよう意図されてはおらず神の御魂の安息の場処を第一義とするものゆえ、この社殿の造りそのものは小規模である。内宮の建造物

群は四つの囲みに取り巻かれている(図10)。第一の囲みのみが、広く人々に開かれた門口によって他と区別される。身分の高い選ばれた人々は第二の囲み内への立ち入りが許されるが、第三と第四の囲みの内は最高神官たる天皇のみに制限されている。特に許された参詣者は神官によって奥の社に面した場所へと案内され、そこで神に向かつて深く一礼し三度手を打つことを得るのであるが、これは、天皇と日本民族の尊き祖先に対して崇敬の念を表した「(Rubenstein 1989:84)」を示すものである。

四つの木製の柵垣の向こうに、訪問者はV字型をした屋根で金属装飾で煌めく部位(図11)を垣間見ることがある。カツオギ(鯉木)と呼ばれるこれらの部位はもともと風に対する防衛として機能するオモシであったが、次第に天皇の御所の様式化したシンボルとなった。要約するに、丹下健三はこう断ずる。

自然の間から、古代日本人の旺盛な概念形成能力が、伊勢【神宮】の形へと集積していく魂の様々なシンボルを徐々に形作っていた。ここにおいて、とこしえの間ととこしえの光が、命みなぎるものと美的なるものが、均衡し、そして自然と調和した世界が自らを劈き現わす。

伊勢神宮の社殿建築は、たとえそのモデルが質素な高床貯蔵庫にすぎない

ものであったにせよ、日本の人々による最初の建築上の偉業である。この貯蔵庫については、丹下健三が以下の如く描写するものである。

この貯蔵庫をとりわけ特徴づけるものはその壁の構造であり、その壁はログキャビン【丸太小屋】様に四隅で相互に交差する板で出来ており、屋根の重みを直接支えるようになっている。今日我々が目にする伊勢の内宮と外宮の両宮の主聖殿の作りは唯一神明造ゆいしんめいづくりと呼ばれ、柱と梁から構成され、柱と柱の間に板がはめ込まれて壁をなし、手すりつきの張り出し床を伴うというものである。

六七二年から六八六年まで在位した天武天皇の時代以来、千三百年以上にわたって、内宮と外宮がいずれも二〇年周期で立て直され続け、最近では一九九三年に六五度目の建て直しがおこなわれているということはきわめて目覚ましいことである。これがゆえに、バチャード(Chang 1965:9)に倣えば、現在の社殿は、極めて古く極めて新しいのである。渡邊保忠(1974:26)は「の建て直しによる歴史記憶の喚起という効果を次のように説明する。

立て直されて間もない社で否応なく目につく真新しい木材に、見る者はこの聖殿をかつてそうであったように想い描くことを余儀なくされる。言い換えれば、建物それ自体は変わり続けていても、神道の社は最初の建築の意図、基本デザインをとどめるように建てられており、見る者が想い描くよ

う求められるのはまさにこのかつて存在した形での古しえの社の構造なのである。

あるひとつの建築様式がこのようにに永續性を持ち得たところに、人はどのようなにして神話思考がなんらかの確立された概念に時代を超えた価値を吹き込み得るかのこの上なき例を見出すかもしれない。伊勢社殿群が日本の他のあらゆる神道聖殿の原型となっていたことからすれば、この同じ基本デザイン、配置様式が繰り返されるところに、日本の神道信者達が人間と神性の統一はこの神社建築にこそその真実の姿を見せているのだと認めていることが明らかになっている、と言えるのかもしれない。それゆえ、丹下健三がこれらの社殿を建てた者達の起源にまで遡って、この確立された社殿設計とその定期的な再構築のもつ神話的な意味の認識を次のように表明したとしても驚くには当たらない。

日本人が神なるものを垣間見ようと試みる時、この形こそがそのシンボルとなつたのである。あるいは、日本人はこの形の中に神なるものを見た、というべきか。この形の創出を支えたエネルギーこそがまた日本人を一つの民族へと鍛結していったエネルギーでもある。この形こそ日本人の原初の本質を映し出しているものなのである。

神々を視覚的に提示するよつなものが伊勢神宮には一切見られないところから、丹下健三はそのものが、諸々の

神話の象徴的な形」であるとする。本質において、伊勢神宮は神道の世界を表現している。「シントウ」とはこの言葉を構成する二つの漢字の中国語読み【音読み】であり、通常「the Way(道)ないし「Teaching(教え)of the Gods」と訳される。しかしながら、神道S「the Way(道)とは天と地の全体性を包含するものである。自然と超自然の統一が永在しているが」とき神路・島路両山の裾野の森に座する伊勢神宮のような神道神社を理解する鍵は、神の道「(こは)は神」と省される」という概念である。

S.Shunzu(1975:25)は同じ説明する。

この語「神」はまず第一に天と地の様々な神に向けられたものである…、しかしまた、鳥、獣、草木、海、そして、その並外れ際立った力ゆえに畏れ敬われるに足るあらゆるもの、それらもまた神と呼ばれる。より重き神たちはその程度を異にしつつも誕生、成長、変化、そして死と関るものとされてきた。高き天の原(高天原)の住神達の中からやがて二人の神イザナ式(伊邪那岐)とイザナミ(伊邪那美)が現れ、二人は太陽の女神と月の神を産んだ。

また、丹下(1965:39)の説明するところでは、伊勢において崇められている神々は

自然及び農耕と何らかのつながりを持っている。水、井戸、川、池、そして滝につながる神があり、また、海に、農業に、そして、

太陽や月の如き自然現象につながる神がいる。これらの神々が、我々に太古の昔を憶い起こさせようとするかの如く、五十鈴川の畔で伊勢湾に臨んだこの深い森の中にひっそりと住まわっている。あたかも、広々とした空間の中で天地開闢(日本列島創造)神話の伝説的世界が我々の眼前に繰り広げられているかの如くである。

天と地は別のものであっても、ふたつは同属であり、両者は統一されて自然における諸々の循環を映し出す。同様に、定期的に再建されるがゆえに永きにわたりその姿が変わることの無い伊勢の社殿構造もまた、川添登(Tange 1965:167)が同時的な対立と調和を開示するものと言っているの、自然の循環に属している。このような見方は、人間もその一部をなす、同時的な対立と調和という四辺界宇宙に関するハイデッガーの洞察と響きあうものである。死すべきものたる我々人間はなによりもまず地上に縛りつけられた存在である(Heidegger 1949:274)。地の上にあるということとは天の下にあるということであるゆえ、建築物を作り出すことによつて我々は、自分達はまた天とも関係を持っているのだと肯んずる力を得る。天と関係を持つということとは超越的なものとの関係を含蓄する。なぜなら、神々もまた人間と同じく天と地の双方に関りを持ち人間と同じようにこの世界に暮らしているからである。

神道においては神々が具体的なイメージで提示されることは無い。「神々のイメージで思考するかわりに、日本人は神々の動き回る空間のイメージを持つて思考する」(Tange 1965:30-31)。非常に古い時代から訪問者が近寄ってはならない領域を画定するため、藁縄が使われてきた。これらの領域が今日なお、この空間は神の占有するところであることを示し、また、同時に神々それ自身を象徴しているのである。これは、ミルチャ・エリアーデ(1964:167)の自然崇拜に対する洞察を思い起こすことで説明されるだろう。天地にあるモノに対する崇敬はいわゆる物神崇拜(フェティシズム)ではない。崇敬されているのは木や泉や石ではなくて、それらを介して顕現する聖なるものなのである。

## 評価

完璧なる均衡を持った四辺界

伊勢の内宮と外宮においては、自然的なもの超自然的なものが密に肩を寄せ合っている。が、それはあくまで両者がその別個の同一性を保持した形においてである。このことは、それらの空間の明確な区切りに現れている。なぜなら境界の画定はモノを建てること、

住まうことの必須の前提であるからである。ルベンシュタイン(1989:81)は「伊勢神宮において」人の手によってそれぞれの石が手入れされ、玉砂利の一粒一粒にどんなに世話がかけられていようと、ここを支配するのは自然であって、人間ではない」と言つ。しかしながら、自然は人間と神のいずれを排除するものでもなく、死すべきものと超越的なものも全てを包み込んでいる。天と地の領分、神々と死すべき人間の領分は、結び合わされて、ハイデッガーがその論文 *Building dwelling thinking* (1977) に描く、四境界の統一へと到る。この哲学者によれば、天と地と神と人間が相互に關係を結んでたち現れてくるあるいは「存在にいたる」ことによつて世界はその姿を劈く。天と地でもつてハイデッガーの意味するものは物質世界の総和、あらゆる生命体と無生物の総体である。しかしながら、統一的结构体としての四境界は動的な性格を持つものである。それは、その四つの構成要素の統一的一性とそれらの間の相違の双方を反映するのである。ハイデッガーの用語法で言えば、四境界は、芸術や建築の作品を含むすべての真正なるモノの中に「安置」【"guarded"】されている。

天と地の間の統一と相違の双方が、人間たちが居住の充足を見出せる状況を形成してくれるような真正なる建築の中には反映される。真正なる居住のためには人間達は建築しなければならず、そして建

築は整地、あるいはたとえはひとつの部屋のような明確に区切られた空間を必要とする。これらの考えを伊勢と結びつけようとする時、丹下健三(「川添登」1999:267)の表明する類似の考えを引用してもよからう。二人は、内なる宮と外なる宮の二つに区分したということは、地上的なものと天上的なものの均衡を目に見える形で以つて承認するものである、と指摘する。かくして、人間生活における基本的必需物を統べる外宮は、天空のある要素を祭る内宮と相い補いあうものとなる。この洞察は、宗教的な観点と建築的な観点のいずれにおいても、これらの社の持つ意味の或る側面へアプローチする際の基礎となるものとみなし得るであらう。

#### 社の自然的、生態論的性質

伊勢神宮は神道信仰の枠を越えたメッセージを世界に送っている。神宮は、およそ木石ならぬあらゆるものが免れ得ぬ自然の循環というものを自らを以つて示しているのである。生と死、誕生と死亡、老衰と回春の絶え間ない過程の中で万物は現れ、朽ち、消えていく。伊勢神宮の社は、生の過程の持つこれらの両極性のひとつの原型【archetype】、再生と破壊がそこで合一されるようなひとつの原型を体現しているのである。神道信仰は生命全体の統一とあらゆる生命系の生態バランスを尊ぶ。建築のための自然素材の

生産は「自然の」破壊を内包するものではないが、ヒノキから構造材を拵える作業場は伊勢神宮に柱、梁、壁パネル、柵材といった建築部材を新調し、そして、それらの部材は又二〇年サイクルの建て替えにおいて他の社殿でリサイクルされるのである。これは、アヒタル(1998)の、あらゆる有機体は時間の流れの中では有限にして孤立のものではあつても、誕生と産出を通して常に回帰するものでもある、という考えとこだましあっている。

#### その建築デザインの美学と独自性

個々の有機体あるいは個々の社は終わリアルものではあつても、それらはまた同時に誕生あるいは再生を介して終わりなきものでもあるのだ。神道は自然宗教であるゆえに、周期性がその基本概念の一つをなしている。そこから、その社殿の再生は、自然界の季節に見られるような再生を象徴するものと解釈できる。また、神々のための社はその神々の持つ恒久的側面を何らか反映しなければならぬ。ところが、皮肉なことに、時空の内に存するいかなるものも恒久性を持つてはいないのであり、この難点を回避する唯一の方法が神々の住処を定期的に再生することなのである。

#### 日本とヨーロッパの建築表現の比較

丹下は日本とヨーロッパの建築表現の間の相違をこのようにとらえている。



空間を形あるものとするのではなく、西洋  
においては、その空間を自然から振り取り、  
それを丸天井や円蓋の中に積み上げ、ここ  
はそれらの要素がゴシック大聖堂において交  
響曲の楽章のいくく纏め上げられる、ここ  
にこそ意味した。このように産み出された空  
間は自然とは別個の、一つの宇宙、超越的世  
界であった。

【これに反して】日本の建築における空間は  
自然そのものであり、ここは、空間はあくま  
で自然から授けられたものである。区切られ、こ  
そすれ、その空間が組み立てられて自然から  
切断された自立の世界を成す、ここにはな  
い。その空間はその周りのものとの密接な関係  
にあるものとみなされ、常に、自然との一  
体性に対する強い希求を見せている。ミニマ  
ムの心情とでもいえるべきものが日本の空間に  
はたまたまある。

### まとめ

永い文化の歴史の様々な時代において、建  
築は人間存在に尊厳を与える知識や技術の  
表現手段であり続けてきた。物理的、心理的  
の両方をもち、伊勢神宮は出かける、ここは特  
に難しくはないが、魂の旅はまじり、長くまの  
になる」とハチャードは巧みな描寫をこつこ  
つと。伊勢神宮は、時間の支配下にある人間存  
在に尊厳を与えるだけでなく、過去、現在、  
未来の合一を超越的に理解せよと求めつ  
てくる。そして、この合一、神話的、このよ  
うにされた永遠の現在なのだ。

### 原註

図版はすべて建築家Arthur Rapanosによ  
って様々な資料をもとに描かれたものである。

### 参考文献

Avital, T. 1998. Mindprints: the structural  
shadows of mind-reality? Symmetry, Science and

Culture [The quarterly for the International  
Society for the Interdisciplinary Study of  
symmetry] 9(1): 47-76.

Burchard, J. 1965. Introduction. In K Tange  
and N Kawazoe (eds), Ise: prototype of Japanese  
architecture. Cambridge, Mass: The MIT Press: 8-  
13.

Eliade, M. 1964. The quest for the origins of  
religion. History of Religions 4(1): 163-170.

Heidegger, M. 1927. Sein und Zeit  
(Gesamtausgabe 2, 1977). Frankfurt:  
Klostermann.

Heidegger, M. 1949. Hölderlin and the  
essence of poetry. Existence and being. Indiana:  
Regency/Gateway.

Heidegger, M. 1971. Building dwelling  
thinking. Translated by A Hofstadter. Basic  
writings (1977). New York: Harper and Row.

Kawazoe, N. 1965. The Ise Shrine and its  
cultural context. In K Tange and N Kawazoe  
(eds), Ise: prototype of Japanese architecture.  
Cambridge, Mass: The MIT Press: 165-206.

Rubenstein, BR. 1989. St Peter's and Ise  
Jingu: a comparative study in religious  
architecture. Dialogue & Alliance 2(2): 75-92.

Shunzu, S. 1975. Japanese ethnocentrism. In  
The Japanese mind, edited by CA Moore.  
Honolulu: The University Press of Hawaii.

Tange, K. 1965. Ise: prototype of Japanese  
architecture. In K Tange and N Kawazoe  
(eds), Ise: prototype of Japanese architecture.  
Cambridge, Mass: The MIT Press: 13-57.

Watanabe, Y. 1964/1974. Shinto art. Ise and  
Izumo shrines. Translated from the Japanese by  
Ricketts. Tokyo/New York: Heibonsha/Weatherhill.

\*\*\*\*\*

### 訳者註記

○文中で太字角括弧(【】)はすべて訳者  
の補った日本語を意味する。

1. A cosmological fourfoldの訳は「こ  
この原綴ハイネッカー自説の「ユ

ン語)は "das Geviert" と思われませんが  
この語の通常の「ユン」語における意味は「四  
辺形のもの」正方形、四角い場所です  
(『マクセルと独和辞典』三修社)。通常「ハイ  
ネッカー関係の翻訳ではこの「ユン」に訳さ  
れているのは時間の制約上十分調べるこ  
とを得ませんでした。したがって「ユン」は  
鬼頭英一(著作集第四巻「現象学ハイネッ  
カーの存在学」公論社、P.111111)とは(い  
わゆる)四者集約、もう少しだけ新しい  
ユン」で、茅野良男(人類の知的遺産75  
『ハイネッカー』講談社、P.10011)で「方  
界」とされています。その後、一定の定着  
した訳語があるのかは、訳者の浅学非才  
と時間制限により不明です。両大家のも  
のを折衷した当座の訳語であることを御  
了承下さい。

1. ハイネッカー関係の翻訳書を調べるにあ  
たっては山岡悦郎先生が便宜を計って下さ  
いました。本文中に言及されている文書  
の和名(本来の文書名)に関して塚本明先  
生から「教示を頂きました。ハイネッ  
カー、エリアーデが引かれている周辺の訳語  
について、久間泰賢先生が相談に乗って下  
さいました。原文のある箇所について解釈  
しあぐねていた時、重大なミスタイプの存  
在を指摘して下さいましたのは岩崎康文先生  
です。このミスタイプの場所を含め、幾つ  
かの点についての訳者の問い合わせに原  
著者マレ先生が原文のかんりの書き換え  
を含む懇切な対応をして下さいました。  
(但し、諸先生の「助力」にもかかわらず、  
訳業の拙劣を免れ得なかつた責めは勿論、  
訳者一人の負ひをもちます。)

11. 各様な諸者を想定して、多少の読みやす  
さも意識しましたが、それでも、特に、後半  
は決して読みやすさとは言えないものでは  
すが。このため、学術論文翻訳上の作  
法・礼儀を必ずしも遵守してはいないこと  
も、断りつつお詫言います。

翻訳 宇納進一(人文学部教授・英語学)



コラム

# 小津安二郎が描いたもの —ローポジションと子供の眼—

## 平野喜一郎

小津は東京深川生まれの江戸っ子であるが、青年時代を父の故郷松阪で過ごし、飯高町で一年間代用教員をした。けれども郷土が作品の舞台となったのは、旅役者が主人公の「浮草」(一九五九)だけである。そのオリジナル作品の「浮草物語」(一九三四)では長野が舞台であるから、土地柄はどこでもよかつたと思われる。作品の大部分の舞台は東京の下町か郊外である。東京は初期のサイレント時代には大きな意味があつたが、ストーリーの希薄な後期作品において舞台はとくに東京でなくてもよくなつた。彼の遺作「秋刀魚の味」(一九六二)よりも結論的作品といわれている「小早川家の秋」(一九六一)は関西を舞台に、家族の崩壊という一貫したテーマが展開されている。

小津のテーマとはなにか。また彼はなにを描いたのか。小津の初期の作品は、アメリカ映画を模倣した喜劇であつた。だが一九二九年にはじまる世界大恐慌をさかいにして、不安の時代を反映した悲劇になつていく。「東京の合唱」(一九三二)では失職したサラリーマンが子供の入院費に苦しむ。「生まれてはみたけれど」(一九三二)でもまたサラリーマンが悲しむ。上役に媚びておどけた身振りをした父親の姿を16ミリ映画で見せられた子供の兄弟が、労働者風の身振りで不満をあらわしながら重役の家を去っていく。そのあと庶民の哀感を描く、出来(一九三三)、「浮草物語」(一九三六)、「一人息子」(一九三六)、「父ありき」(一九四二)と同じ傾向の作品がつづく。

この間に最初は「兵士」として、二度めは軍情報部員として戦地へおもむき、戦争の苦しみを

なめる。敗戦をシンガポールでむかえた小津は翌年帰国し、廃墟の東京下町の庶民を描いた「長屋紳士録」(一九四七)をつくる。長屋の老婆の家に住み込んだ戦争孤児の話である。つづいて翌年には田中絹代主演「風の中の雌鶏」(一九四八)をつくる。戦地からかえる夫を待ちつづける妻が病気の子供の入院費を得るために売春にはしる悲劇である。

ところがその翌年、これまでの貧しい庶民ではなく中流階級を主人公とする原節子主演の「晩春」(一九四九)がつくられる。今日、小津らしい映画といわれる、伝統的な日本の美が結実した作品である。これら小津の作品は、特有の時間的・空間的な整理がなされた端正な構図の「絢爛たる影絵」といわれるものになる。人物を撮る時も黒澤明のように顔をクローズアップで大写しせず、かならず胸から上を撮る。移動しない固定カメラは遠景・中景・近景を交互に繰り返し落ち着いた安定感を生み出す。

画面構成の息をのむほどの美しさに目を奪われた人々は、小津は日本の伝統美の世界に帰して現実世界に背をむけているといった。しかし「家三部作」といわれる「晩春」(一九四九)、「麦秋」(一九五二)、「東京物語」(一九五三)のテーマは、娘の結婚や親の死による家庭の崩壊である。そこには戦争の犠牲と戦後の生活難が影を落としている。それは十年後に始まる高度経済成長のもとでの地域共同体や家族の崩壊の予告である。

しかし、それ以上に小津の現実を見る眼の確かさを、私は、彼のカメラの低い位置(ローポジション)に見る。彼の低い視線は人を見下げな

い人間尊重によるとか、日本人の畳の視線だといわれてきた。それはたしかだが、私はこの低い位置をなによりも子供の視線だとおもふ。小津の描くおとなたちはたしかに立ち居振る舞いが美しい。しかしこれらのおとなたちは、よくみると利己的で自分勝手で、おとなの社会もなにかずれてどこがおかしい。対照的に、それらを見る子供の視点は正常である。「生まれてはみたけれど」の兄弟はおとな社会の歪みをみてそれに背を向けた。ここでとりあげた重要作品にはすべて子供たちが登場し、奇妙なおとなたちを下からながめている。後期の「お早よう」(一九五九)では、主人公は子供の兄弟であり、おとなの社会を疑問視し相対化している。

子供の登場の意味はそれだけではない。おとなの死にたいする新たな生命である。「小早川家の秋」のラストシーンで老夫婦がつぎのような会話をかわす。「けど、死んでも死んでも、後から後から、せんぐりせんぐり生まれてくるわ」。「そやなあ、よつでけとるわ」。「これはかならずしも不吉な会話ではなく、世代交代による人間再生への期待でもある」。「麦秋」ではストーリーよりも、もっと深い輪廻というか、無常というかそういうものを描きたいといった小津の意図は、その後の作品では子供の存在によってより積極的・肯定的になっている。

小津の後期の作品では、「東京物語」以外はテーマが隠されている。そのことが、カメラを移動せずカットを繋ぐだけの表現方法で自然に実現されている。したがって小津映画には見るたびごとの新しい発見がある。現代映画の巨匠たち、侯孝賢(台湾)、ヴィム・ベンダー(ドイツ)、

アキ・カウリスマキ(フィンランド)らが小津を絶賛するのはこの故でもあろう。小津は地域や日本国を越えて国際的な存在である。来年二〇〇三年十二月十二日は小津生誕百年、没後四十年である。

ひらのきいちろう

人文学部教授・経済思想家

## 第16回 三重大学 人文学部 公開講座 朴 恵淑

二十世紀の後半は地球温暖化やごみ問題といった様々な環境問題、高齢化、少子化、産業の空洞化、景気の氷河期といった多難な暮らしを余儀なくされました。二十世紀のスタートとなつた二〇〇一年においてもニューヨークの同時多発テロで見られるようなイデオロギー、宗教、民族間の対立など、どれひとつをとっても深刻なニュースばかりが目立っていました。

このような社会情勢を踏まえ、二十一世紀最初の第十六回人文学部公開講座のコンセプトとして私達の暮らしの基本となる食・文化・社会について真剣に考えることとし、対象地域についても国内ばかりでなく海外にも目を向け、世界各地でどのような食文化がはぐくまれていたのかについて取り上げることとしました。何回も担当者会議を開き、世界食歩き 食・文化・社会」といったテーマを決め、講師陣には学部内の専門家に加え、学外からも魅力的なゲストを迎えることとしました。料理研究家で前志摩観光ホテル総料理長兼総支配人の高橋忠之先生をはじめ、太鼓奏者で本学客員教授の林英哲先生などを講師として迎え、これまでとは一味違った公開講座を持つことができました。

高橋先生や林先生は時の人です、日程調整

は極めて困難でしたが、人文学部公開講座の新しい試みを是非成功させたい熱意が伝わり、快く引き受けて頂くことができました。そのかいあって、受講者が八十七人というこれまでにない多くの市民の参加と毎回八十三パーセント、六十三パーセントという高出席率を得ることができました。講義内容、テキスト、講座の運営に関する感想についても、ゲスト講師の講義がとてもなく感動した、単なる講義ではなく、人生そのものが講義で興味深かった、毎回とても楽しい話が聞けた、または非パート2を願いたいとの意見を頂くことができました。

次期待する講座のテーマについても、文化や文明といった社会の変化に関わる話題、高齢化社会、ごみなど身近な環境問題、風水といった個人と社会の接点にある話題、休暇の過ごし方といった実生活に関わる話題などへの希望が多く寄せられました。普段何気なく生活している地域の持つ様々な方面への接近が必要に思えます。三重を再発見させるようなテーマ、三重のくにの持つ二十一世紀に繋がる素晴らしい資産や教訓となるもの、例えば、世界遺産への登録が期待される熊野古道、日本人のアイデンティティーとしての伊勢神宮、芭蕉の俳句、四日市公害の教訓などについて考える機会が作れたら、人文学部の公開講座は地域社会と密着した出会いの場になると確信しています。第十七回の公開講座も期待して下さい。

ばくけいしゆく

人文学部教授・環境地理学・公開講座実施委員





## 書評

みえ熊野学研究会編

# 『熊野道中記』

—いにしへの旅人たちの記録—

山田雄司

本書は、東紀州地域の歴史や民俗、文学、地理、産業、動植物などの分野について学問的な立場から総合的、専門的に研究し、その成果を町おこしや地域の活性化に役立てることを目的とする。」として創刊された『みえ熊野の歴史と文化シリーズ』の第一号であり、東紀州に暮らす研究者が集まった『みえ熊野学研究会』での研究成果である。

本書においては、古代の参詣記から近世の参詣記まで、幅広く紹介している。

近年近世の参詣記について注目が集まり、未翻刻のものが徐々に活字化されつつある。紀南文化財研究会により翻刻され、紀南郷土叢書に収録される『紀南郷導記』『熊野巡覧記』『熊野日記』をはじめ、『三重県史資料編近世五』に収録される竹川竹斎の『高野熊野日記』、『松原市史研究紀要六』に収録される寺内安林の『熊野案内記』、『泉大津市史第五巻』に収録される『熊野もつて道中附』、『秋田県増田町文化財協会による、安倍五郎兵衛天明三年伊勢詣道中記』などをあげることができる。本書においては、尾呂志(御浜町)の富豪として名を轟かせた酒道家東勘兵衛穀軒らによる、関東筋名所喰ヒ認め」と題する道中記や、新宮横町の小万物屋伊右衛門が畿内をめぐったときの道中記『千穂道中記』などが紹介されている。こうした地方に残る史料を紹介し、多くの人が利用することができるようになることは、研究の新たな展開をもたらすだろう。

中世においては、蟻の熊野詣」と言われるほどの参詣者を見た熊野三山巡拝も、近世になると参詣の意味の変化や紀州藩による勸進活動の制限にともない、伊勢参詣が増加する一方熊野詣は数が減少したとされている。しかし、那智の如意輪堂(青岸渡寺)が西国三十三観音巡礼の第一番札所であったため、西国巡礼を兼ねた熊野詣も行われた。また、『神道大系参詣記』に収められている、其浜ゆふ」などからは、近世においても真摯な祈願をする場合、熊野に参詣していたことがわかる。現在残る石畳は、ほとんどが近世につくられていることから、信仰の厚さがうかがえよう。

中世の熊野詣に関しては数々の研究成果があるが、近世の熊野詣について体

系だった研究はまだまだ行われていないと言えよう。これらを調査・研究することによって、新たな熊野像の形成、さらには日本の霊地における熊野の位置を再検討していくことにつながるだろう。本書の取り組みはその第一歩ともなるべく、地元の研究者によってなされたことに意味がある。他からの「開発」でなく、先人が残した足跡を地元の人々が光を当て、再認識していくことが、郷土にとって大きな財産となっていく。世界遺産への登録準備ともあわせて熊野への関心が高まる中、ブームに終わらせないのでなく、地に根ざした学術研究を高めていくことが重要である。

本書においては、それぞれの道中記がどのような意味をもっているのか、そして位置比定にとどまるのでなく、道中記相互の比較を行うことによって道中記をどのように活用していったらよいのかという方法論が見られないのが残念である。さらには、それぞれの論考に視点や叙述のばらつきが見られることも確かである。本書で紹介された道中記の活用は、読む人それぞれにかかっていると考えるかもしれない。地元での地道な取り組みに対して、大学として何をしておくことができるのか、そのようなことも考えさせる一冊である。

伊勢文化舎、二〇〇一年(二四四頁)

やまだゆうじ  
人文学部助教授・日本中世史

校舎への長い長い坂道の横には  
小学校の校舎がある  
生命倫理論 蔵田伸雄

金曜日の午後の講義が終わったあとのことだった。「大阪教育大の附属の小学校に刃物を持った男の人が侵入して、小学生が何人かなくなったそうですよ。」それを聞いてまさか、と思った。だかともかく仕事はある。その日の夕方には学生達が専修名簿の印刷作業をしてくれることになっていた。てきぱきと作業を進める学生達にその場をまかせて研究室に戻り、インターネットでニュースのビデオを見る。「今日の午前、大阪教育大学附属池田小学校に刃物を持った男が押し入り...」まさか。高校時代の悪友たちとの間でメールが飛び交う。友人の一人のメールにはこうあった。「勤弁してくれ。」なんだかよくわからないままに時間は過ぎ、無事名簿は完成し、そのあとは夜間開講の大学院のクラスである。形容しがたい混乱のおさまらないまま、院生と環境NPOについて議論する。

私は附属池田中学校、高校の卒業生だが、附属小学校の卒業生ではない。しかし自分の母校ではないにしても、自分が十代を過ごした大切な場所だ。その大切な場所を汚された気分だった。

次の日の土曜日には妻が公開されたばかりの『ハムナブラ2』を見たいというので、オールナイトの映画館で夜中の二時から荒唐無稽な冒険活劇を見る羽目になる。映画は面白かった。映画の中ではおびただしい数の人が死んでいた。しかし主人公は勇敢で、悪のミイラは滅び、邪悪な「スコープオン・キング」は退治され、世界の破滅は防がれた。映画館を出ると夜が明け始めていた。

でもこのもどかしさは何なのだろう。理不尽な子どもたちの死。八人の子どもたちのほとんどは一人っ子だったという。遺族に向かって希望を持って、と言うのはあまりにも残酷だ。では自分に何ができるのか。ホロコーストのあとで神を信じることが出来ますか?神がそんな残酷なことを許したのですか?それでも人生は続いていく。明日の仕事が待っている。でもこのもどかしさを忘れてはならないのだ、と思った。

北海道大学大学院文学研究科助教授 前人文学部助教授 )くらのぶお

## 編集後記

二〇〇〇年問題とか世紀末とかが喧伝されてきたのは、ほんの二、三年前にすぎないのですが、ずいぶん昔のことに感じられます。これもひとえに、我々の眼前に思いもよらない事件、事態が日々出現しているからにほかなりません。時代の展開は、ますます加速の度を強めています。十年一昔という言葉が、なんの違和感もなく使えたのは、一体いつのことだったのでしょうか。

そこで今号の第一特集は、「三重における進取の精神」というテーマで、時代に先んじてきた先人たちが、現在各分野をリードしている方々をとりあげ、そのゆえんを探ってみました。どれも時代と正面きって組み合う姿勢に、その秘密があるように思われましたが、読者諸賢はいかが思われたでしょうか。また第二特集には、今年度の大学院人文社会科学研究科の科目「三重の文化と社会」の成果である「香良洲町の研究」を掲載いたしました。忌憚ないご批評をお願いいたします。

なお本号の刊行にあたっては、三重大学教育研究内容等改善充実経費の交付を受けました。関係各位に感謝いたします。

谷井俊仁

三重大学大学院人文社会科学研究科地域交流誌

## TRIO - 三重の文化・社会・自然 - 第三号 c 2002

発行日 2002年3月23日  
編集兼発行者 西川洋・谷井俊仁・洪恵子・廣岡義隆・岩本美砂子  
発行所 三重大学大学院人文社会科学研究科  
〒514-8507 三重県津市上浜町1515  
Tel: (059) 231-9195 (庶務係)  
Fax: (059) 231-9198  
URL: <http://human.mie-u.ac.jp/>  
e-mail: [dean@human.mie-u.ac.jp](mailto:dean@human.mie-u.ac.jp)  
印刷・製本 株式会社アイブレーション  
〒516-0017 三重県伊勢市神久3-5-67

## ***Ise Jingu*: a manifestation of the coeval past, present and future**

**Estelle A Maré**

Department of Art History  
University of South Africa

The most sacred collection of Shinto sites at Ise (Mie Prefecture, Japan), collectively called *Ise Jingu*, which centre on the *Naiku* or Inner Shrine (figures 1-3) and the *Geku* or Outer Shrine (figures 4-5), is not well known in the West. In Western books on architectural history in which a chapter is devoted to Japanese temples, shrines and castles, Ise usually merits an illustration of only the *Naiku* main building, accompanied by a description. Reference is usually made to the fact that the shrine buildings are continuously rebuilt every twenty years on adjacent sites. At most, a description of the architectural style of the main and subsidiary shrine buildings is limited to their steeply pitched thatched roofs with spreading eaves, platform construction for the main rooms, and light timber partitioning for the walls, with an explanation that the prototype was the indigenous tent-shaped thatched Japanese hut on stilts. Since the layout of the shrine buildings and their precinct enclosures are basically symmetrical, Japanese thought and planning are said to be characterised by extreme formality which contrasts with the natural forms of the environment. While descriptions and historical facts are relevant, the purpose of this article is not to describe, but mainly to interpret the meaning of *Ise Jingu* as a unique manifestation of religious architecture. For this purpose, reference is made to the ideas expressed by the Japanese architects Kenzo Tange and Noboru Kawazoe in their book on Ise. Their observations on Ise as a prototype of Japanese architecture and its cultural context are supported by Western theoretical insights formulated by the German philosopher Martin Heidegger, who postulated the concept of a cosmological fourfold - the unity of heaven, earth, humans and the divinity - which can be said to manifest in all authentic architecture.

According to legend, *Ise Naiku* was founded in the reign of Emperor Suinin (249-280 CE). Suinin's daughter, the Princess Yamato-hime, went from place to place in search of a good location for the worship of the Great Deity. When she came to the Ise area she received the following oracular message: "Since this land of Ise is a land where no turbulent tempests blow, and is a peaceful land where the twang of the bow and the hiss of the arrow are never heard, I desire to rest in this land" (Tange & Kawazoe 1965: 37). The princess then erected a shrine for the Great Deity, the Sun Goddess Amaterasu O-mi-Kami, who was worshipped as the foundress of the Japanese imperial line and guardian of the nation. This goddess has her dwelling at the main building of the *Naiku* (figures 6-7), in a sacred mirror, which is one of the three sacred treasures of Japan. It rests in a boat-shaped container, approximately two metres long, set above the central pillar of the main building in order to recall its arrival in Japan.

The structural materials applied at the Ise shrines are mainly cypress, cedar and thatch with some metal ornamentation. There are no sculptures and no intricate spaces to fathom, but the refinement of detailing grips the attention. However, more profound meanings should be given priority in the discussion of *Ise Naiku* and *Ise Geku*, situated some four kilometres apart. The shrines embody an architectural endeavor that makes the presence of human beings as creators of order visible to the deities who are invited to dwell in these earthly places. In the layouts of the *Naiku* and the *Geku* a sensitive awareness of the presence of

mountains, forest and sky is retained so that the origins of the Shinto religion can still be sensed there. The trees, a waterfall, and the various natural phenomena that surround the *Ise Jingu* clearings complement the architectural forms, in which there exist a natural relationship between elements of the earth such as stone, wood and water, and air and wind which belongs to the sky.

The *Naiku* is approached by means of the wooden bridge which spans the Isuzu River; at the end of the bridge a *torii*, or gate, announces the entrance to a Shinto sacred place (figure 8). The pathway to the enclosed shrine is paved with small pebbles which cause footsteps to sound *zaku-zaku*, a audible reminder to visitors that the profane space which they tread on is demarcated as separate from the sacred space of the divinities. All over the *Ise Jingu* precincts there are stones and rocks which are venerated as abodes of deities. These are the forerunners of traditional Japanese stone gardens of great artistic beauty, replete with symbolic meaning, because “in these stones and rocks the ancient Japanese saw something of the mystery dwelling within nature and natural phenomena” (Tange 1965: 25). The stones at *Ise Jingu* are cordoned off by ropes and white fluttering paper along either side of the path. This treatment enhances the visibility of the stones and bears witness to the care and respect Shinto worshippers lavish on natural elements (figure 9).

The arrangement of the shrine buildings on the sites within clearly defined boundaries were the symbols of the way in which the deities ranked within the hierarchy of the supernatural world (Tange 1965: 34). During the Nara period (645-794 CE), the *Naiku* had seventy subsidiary buildings, in addition to the main sanctuary and the east and west treasure house. The *Geku*, founded in 478 CE and dedicated to the grain goddess Toyouke-no-Okami, was more modest with fifty. The extensive development of the *Ise* sites testifies to the splendour of the religious festivals of the time and the rich and varied existence imagined for the deities dwelling there. At present the shrines comprise only four rectangular buildings: the *Shoden* or main shrine building, two treasure houses behind the innermost fence, and a meeting hall for priests between the second and third fences. The fence surrounding the level clearing of approximately 18 x 39 metres and the three innermost fences still clearly demarcate the hierarchy of sanctity. Thus the shrines still resemble the description in the *Documents on the rituals of the Great Shrine at Ise*, which dates from 804 CE.

Since the interior of the main *Naiku* shrine building was not intended to accommodate people, but is primarily a place of repose for the divine spirit, it is constructed on a small scale. The *Naiku* complex is surrounded by four enclosures (figure 10). Only the first is marked by a gateway which is open to the public. Selected people of high rank are admitted to the second enclosure, but the third and fourth enclosures are reserved only for the Emperor who is the high priest. The privileged pilgrim may be led by a priest to a position facing the inner shrine where he or she bows deeply and claps hands three times for the *kami*, which signifies that “reverent respect has been paid to the Emperor and the August ancestors of the Japanese nation” (Rubenstein 1989: 84).

Beyond the four wooden fences, the visitor may glimpse the V-shaped external roof elements of the shrine buildings which glitter with metal ornamentation (figure 11). These elements, called *katsuogi*, were originally weights on the roof which served as protection against the wind, becoming, in due course, stylised symbols of the Emperor’s palace. Summing up, Kenzo Tange (1965: 52) avers:

Out of ... nature’s darkness, the vigorous conceptual ability of the ancient Japanese gradually fashioned

various symbols of the spirit culminating in the creation of the form of Ise. Here eternal darkness and eternal light, the vital and the aesthetic, are in balance, and a world of harmony with nature unfolds.

The shrine buildings at *Ise Jingu* are the first great architectural achievement of the Japanese people, even though their model was the modest raised-floor storehouse, described by Kenzo Tange (1965: 45):

A special feature of these storehouses was the construction of the walls, which consisted of boards with the ends crossed at the corners, log-cabin fashion, and which directly carried the weight of the roof. ... The construction of the main sanctuaries of both the *Naiku* and the *Geku* at Ise, as we see them today, is the so-called *yuitsu shinmei-zukuri*, consists of posts and beams, with boards fitted in between the posts to make up the walls, and verandas with railings.

It is most remarkable that for more than 1300 years, from the time of Emperor Temmu, who reigned from 672 to 686 CE, both the *Naiku* and the *Geku* have been rebuilt in twenty year cycles, most recently in 1993 - for the sixty-fifth time. Therefore, the present shrine buildings are, according to John Burchard (Tange 1965: 9), "very old and very new". Yasutada Watanabe (1974: 26) explains the effect of historical memory evoked by the reconstruction:

In place of the new timbers sported by a recently reconstructed shrine, the viewer is enjoined to imagine the sanctuary as it once was. In other words, while the buildings themselves may have changed, Shinto shrines are built to retain the intent and basic design of the original architecture; it is this ancient structure as it once existed that the viewer is required to imagine.

In the persistence of an architectural pattern, one may identify a supreme example of how mythologising thought can imbue an established concept with timeless validity. Since the Ise complex became the prototype for all Shinto sanctuaries elsewhere in Japan, one may say that the repetition of the same basic design and layout pattern reveals an acceptance by the Japanese Shinto believers that the unity of human beings and the divinity is authentically manifested in the shrine architecture. It therefore comes as no surprise that Kenzo Tange (1965: 51) expresses his awareness of the meaning of the established shrine layouts and their periodic restructuring in mythical terms, referring back to the origins of the builders:

When the Japanese people try to glimpse the divine, this form becomes the symbol. Or perhaps one should say that the Japanese see in this form the divine. The energy that sustained the creation of this form was also the energy that welded the Japanese into one people; it reflects their primordial essence.

In the absence of any visual representation of the divinities at *Ise Jingu* Kenzo Tange (1965: 16) describes the shrines themselves as "the symbolic form of the religious myths". In essence, *Ise Jingu* manifests the world of Shinto religion. "Shinto" is the Chinese reading of the two characters which comprise this word and is usually translated as "the Way", or "Teaching of the Gods". However, the Way of Shinto religion embraces the totality of heaven and earth. The key to the understanding of Shinto shrines such as *Ise Jingu*, which is set in a forest at the foot of Mounts Kamiji and Shimaji where the perennial presence of the unity of the supernatural and the natural are felt, is the concept *kami-no-michi* (often rendered only as *kami*), which refers to "god" or "spirit".

S Shunzu (1975: 25) explains:

The term [*kami*] is applied in the first place to the various deities of Heaven and earth ... but birds, beasts, plants and trees, seas and all other things which deserve to be dreaded and revered for the



extraordinary powers and pre-eminent powers they possess are called *kami*... . The more important *kami* were in greater or lesser degree affiliated with birth, growth, change and death... . From the divine hosts inhabiting the plain of High Heaven, there eventually emerged two deities, *Izangani* and *Izanami*, who begot the Sun Goddess and the Moon God.

Also Tange (1965: 39) explains that the deities worshipped at Ise

have some relation to nature and cultivation. There are deities connected with water, wells, rivers, pools, and waterfalls, with the sea..., with agriculture ... and nature phenomena, like the sun and moon. These deities quietly dwell here in the deep forests, by the banks of the Isuzu River and the shores of Ise Bay, as if to remind us of the distant past. The legendary world of the *tenchi kaibyaku* [creation of the Japanese archipelago] myths is, as it were, displayed before us in an expanse of space.

Even though heaven and earth are different they belong together and in their unity they reflect the cycles of nature. Likewise, the Ise shrine structures which do not change visibly over a long period because they are periodically rebuilt belong to the cycles of nature which Noboru Kawazoe (Tange 1965: 167) says reveal a “simultaneous opposition and accord”. This echoes Heidegger’s insight regarding a cosmological fourfold of “simultaneous opposition and accord” of which human beings are part. We as mortals are, first and foremost, bound to the earth (Heidegger 1949: 274). By creating works of architecture we have the ability to affirm that we relate to heaven, because being on earth means being under heaven (Heidegger 1954). Being related to heaven implies a relationship with the transcendental, because, like humans, divinities also relate to heaven and earth and dwell as we do.

In Shinto religion deities are not represented by means of images. “Instead of thinking in terms of images of the deities, [the Japanese] thought in terms of an image of space in which deities moved, and proceeded in various ways to symbolize this space” (Tange 1965: 30-31). Rice straw ropes were used from a very early period to delimit areas which were not to be approached by visitors. These areas still signify that the space is occupied by the deities and, at the same time, symbolise the deities themselves. One may explain this by recalling Mircea Eliade’s (1964: 167) insight into naturalistic cults: “The veneration of cosmic objects is not ‘fetishism’. It is not the tree, the spring, or the stone that is venerated, but the sacred which is manifested through these objects.”

## **Evaluation**

### **The fourfold in perfect balance.**

At *Ise Naiku* and *Ise Geku* the natural and the supernatural worlds are brought close together, but in such a way that each retains its separate identity. This manifests in their clearly bounded space, because the demarcation of a boundary is a prerequisite for building and dwelling. Rubinstein (1989: 81) makes the point that “although human hands have tended each stone, and care has been lavished on each pebble [at *Ise Jingu*], nature rules here - not humans”. However, nature excludes neither humans nor divinities, but is inclusive of all that is mortal and transcendental. The domains of heaven and earth, of divinities and mortals are bound together into the unity of a “fourfold”, as described by Heidegger in his essay “Building dwelling thinking” (1977). According to this philosopher the world is revealed by the advent, or the coming-to-presence, of heaven, earth, divinities and mortals in relationship to each other. By heaven and earth he means the totality of physical nature, the whole of all inanimate things as well as animate beings. However, as a unitary structure, the fourfold is dynamic. It reflects the differences between the components as well as their unified identity.

In Heidegger's (1971: 158) terminology the fourfold is "guarded" in all authentic things, which include works of art and architecture. Both the unity and the differences between heaven and earth are reflected in authentic architecture which forms the context in which mortals find their fulfilment in dwelling. In order to dwell authentically mortals need to build and building requires a clearing, or clearly bounded space, like a room. Relating these ideas to Ise one may refer to similar ideas expressed by Kenzo Tange and Noboru Kawazoe (1965: 167). They point out that the division between the Inner and Outer shrines formally acknowledges a balance between the celestial and the terrestrial. Thus, the *Geku*, which presides over the fundamental necessities of human life, complements the *Naiku*, dedicated to a sky element. This insight may be taken as the basis of an approach to an aspect of the meaning of the shrines, in both a religious and an architectural sense.

### **The natural and ecological qualities of the shrine**

The message that *Ise Jingu* sends to the world transcends Shinto beliefs. It embodies the cycles of nature to which all sentient beings are subject. Everything comes into being, decays and ceases to exist in a continuous process of life and death, birth and death, decay and rejuvenation. The shrines at *Ise Jingu* embody an archetype of the polarities of the process of life in which renewal and destruction are unified. Shinto beliefs respect the unity of all life and the ecological balance of all systems of life. While the production of natural materials for architecture implies destruction, the workshop which prepares the structural parts from cedar wood, supplies newly prepared elements such as columns, beams, wall panels and fencing to *Ise Jingu*, which are recycled at other Shinto shrines during the twenty year cycles of rebuilding. This echoes Avital's (1998) idea that all organisms are finite and unique in the history of time, but at the same time they are recursive through birth and offspring.

### **The aesthetics and uniqueness of the architectural design**

Although each organism or shrine is closed-ended, it is at the same time open-ended through birth and renewal. Since Shinto is a nature religion, periodicity is one of its basic ideas. Hence, the renewal of the shrines may be interpreted as symbolic of renewal like the seasons in nature. Also, shrines for divinities should somehow reflect their eternal aspect. Paradoxically, however, nothing that exists in space and time is eternal and the only way to overcome this is by periodically renewing the abodes of the divinities.

### **A comparison between Japanese and European architectural expression**

Tange (1965: 33) is aware of the differences between Japanese and European architectural expression:

Making space tangible meant in the West wresting it from nature, piling it up in vaults and domes, until ultimately in Gothic cathedrals these elements were integrated like the movements of a symphony. Space thus created was a separate microcosm, a transcendental world, apart from nature.

On the contrary,

space in Japanese architecture is still nature itself, space is bestowed by nature. Even though space is delimited, it is not built up into an independent world severed from nature: it is considered in closest relationship to its environment and always reveals a striving towards oneness with nature. A suggestion of animistic feeling hangs about Japanese space.

### **Summing up**

During the various epochs of the long history of culture architecture has been a means

of expressing knowledge and art which dignifies human existence. The subtle point is made by John Burchard (Tange 1965: 8), that it is not difficult to reach *Ise Jingu* physically, but: “The spiritual journey is longer.” *Ise Jingu* dignifies not only human existence in the realm of time but demands a transcendent understanding of the unity of time past, time present and time future, which is in mythical terms an eternal present.

## Note

All the illustrations were redrawn from various sources by the architect Arthur Rapanos.

## References

- Avital, T. 1998. Mindprints: the structural shadows of mind-reality? *Symmetry: Science and Culture* [The quarterly for the International Society for the Interdisciplinary Study of symmetry] 9(1): 47-76.
- Burchard, J. 1965. Introduction. In K Tange and N Kawazoe (eds). *Ise: prototype of Japanese architecture*. Cambridge, Mass: The MIT Press: 8-13.
- Eliade, M. 1964. The quest for the origins of religion. *History of Religions* 4(1):163-170.
- Heidegger, M. 1927. *Sein und Zeit* (Gesamtausgabe 2, 1977). Frankfurt: Klostermann.
- Heidegger, M. 1949. Hölderlin and the essence of poetry. *Existence and being*. Indiana: Regency/Gateway.
- Heidegger, M. 1971. Building dwelling thinking. Translated by A Hofstadter. *Basic writings* (1977). New York: Harper and Row.
- Kawazoe, N. 1965. The Ise Shrine and its cultural context. In K Tange and N Kawazoe (eds). *Ise: prototype of Japanese architecture*. Cambridge, Mass: The MIT Press: 165-206.
- Rubenstein, BR. 1989. St Peter’s and Ise Jingu: a comparative study in religious architecture. *Dialogue & Alliance* 2(2): 75-92.
- Shunzu, S. 1975. Japanese ethnocentrism. In *The Japanese mind*, edited by CA Moore. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- Tange K. 1965. Ise: prototype of Japanese architecture. In K Tange and N Kawazoe (eds). *Ise: prototype of Japanese architecture*. Cambridge, Mass: The MIT Press: 13-57.
- Watanabe, Y. 1964/1974. *Shinto art: Ise and Izumo shrines*. Translated from the Japanese by R Ricketts. Tokyo/New York: Heibonsha/Weatherhill.